
僕らの町と首吊り死体

yuran

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕らの町と首吊り死体

【Nコード】

N9717K

【作者名】

yuran

【あらすじ】

ごく普通の閑静な町で突然起きた連続殺人事件。

事件とはまったく関係の無かった、ただの高校生代表、久重辰巳は謎の美女、東金凜々子との出会いで共に犯人探しをすることになる。犯人『赤帽子』の正体は？

ミステリー小説を目指していますが、完ッ全にコメディ要素が多すぎです。

多分かなり気楽に読めるんじゃないかと思います。

初めて書く小説なのでどしどしアドバイスをください。

東金凛々子01（前書き）

完全に初心者なのでご指摘していただけるとうれしいです。
一応連載とはなっていますが、不定期です。

東金凜々子 01

僕が東金凜々子とうきがねりりこに初めて会ったのは、初夏だというのにまるで熱された夏祭りの鉄板のように暑かった七月七日のことである。

その日の記録的な暑さによって、体育で行われたサッカーが拷問と化していたことをよく覚えている。

そんな日に僕は出会ってしまった。

自分以外の人間を見下しているような冷ややかな目を持つあの女。美しい長い黒髪と神秘的な品性を擁するあの女。

あいつさえいなければ、僕の日常はごくごく普通の高校生活だったのだろう。

あいつがいたからこそ、僕の日常は壊れていったのだろう。いや、違う。

日常を壊したのはきっと自分自身なんだろう。

あいつはそこで自分のやるべきことをしてただけ。僕はそこに巻き込まれに行った。

あいつと出会ったのは運命でも、宿命でも、なんでもない。多分それだけのことなんだ。

「こんな事ってあんのかよ……」

県内屈指の偏差値を誇るとある県立高校。

その一階、廊下にたたずむ一人の男子高校生。

右手には暑さで砂糖が溶け、食べるには手がベタベタになることは避けられないであろうメロンパンの袋がひとつだけ。

……僕である。

「いくら教室一回戻ったからって、こんなに早く購買のパンがなくなるのかよ!」

今日は七月七日。七夕である。

日本の暦の上では真夏ということにはなっているだろうが、それにしても暑すぎる。

良い感じに暖めたサウナ状態である。

そんな日の四時間目。不幸なことに、これ以上無いってくらい不幸なことに、僕のクラスの授業は体育であつた。

暑さにやられ保健室に運ばれる生徒が数人いる中、風呂敷が望めるようなサッカーは続けられ、当然、授業が終わるころにはプール——いや、海に浸かったのかと勘違いするほどに濡れに濡れた体操服。

この状況で女生徒と会いたい男子高校生など日本全国探してもどこにもいないことだろう。

僕ももちろんその例外では無い。

本来、四時間目に移動教室等がある時は他のクラスよりも早めに購買に行けるので、利用する僕にはうれしい限りなのだが。

この場合は致し方ない。一回教室に戻って着替えてから行くことにしよう！

……とか余裕こいた結果がこれですか。

右手のメロンパンの袋を見つめる。

手の感触からわかる、これはもはやパンではない。

まさか二大勢力の一つ（ていうか二つしかないんだけど）であるところのおにぎりが全部腐って販売中止になっているとは思わなかった……。

それによって、おにぎり派である生徒が一気にパンに流れて惣菜パンが全滅。

僕が購買についた時に残っていたのは、暑さでもはやパンではなくなったメロンパンのみ。

食堂は今日は休み。

さらに自販機もどっかのバカが回し蹴りを決め、故障。

飲み物も買えず、途方に暮れているところで現在に至る。

「どうすんだよ……。宇佐美にでも分けてもらうか？でもあいつの弁当なんて野菜しか入ってなさそうだしな——よし、バカにでも頼むか」

とりあえず昼飯調達の目星をつけ、三階の教室に戻ろうと踵を返したところで僕は度肝を抜かれた。

目の前に焼きそばパンを僕に差し出している小柄な女生徒がいた。決して焼きそばパンを差し出しているところに驚いたのではなく、いや、それも驚いたが、それよりもその女生徒。

めちゃくちゃに可愛かった。

そこらのアイドルなんてはつきし言って相手にならない。

黒ストレートのセミロングの髪に、白目があるのかと思うほど大きな黒目。暑さで紅潮した、程よい厚さの唇。

胸元に青のタイをしていたのでどうやら僕と同じ一年生のようだ。その容貌は、暑さという地獄に舞い降りた天使に見えた。

「あっ！あの！これいります！？」

「は？」

「焼きそばパン！いります？」

その女生徒は意気揚々と僕に差し出した手をさらに押し出す。落ち着け自分。

……OK。冷静になってきたぞ。

この状況はちよつと普通じゃない。

なぜこの娘は僕に焼きそばパンをあげたがっている？

僕はこの娘とは絶対に初対面だ。

それは断言できる。

こんな可愛い子を見て大腦が忘れるわけが無い。

「あの〜なんで僕？」

僕の問いかけにその女生徒は意味がわからないようできょとんとしている。

「ああ、すいません。言い方が悪かったですよね。なんであなたは僕にその焼きそばパンをくれるんですか？」

僕は丁寧に説明する。

すると両手を目の前ではちんとたたくと笑顔で女生徒は言った。

「ああ！それはですね。中庭で昼食を食べていたところ、廊下でメロンパン片手に焦燥しきっている人がいたので、『きっと、購買でロクなもの買えなかったんだろうな』って考えまして……えっと？」

……。

同情だあああっ！！哀れみですよねえ、これ！？

僕がシヨックを受けたのは表情に出ていたらしい。

その女生徒は慌てて補足した。

「？……あっ！違いますよ！？これは一番人気の、授業終わり五分前にトイレ行く振りして購買まで走らないと買えない、グレート焼きそばパンではありませんから！！入学してから毎日並んで並んで、今日初めて買えて、うれしくてうれしくて最後までとっておいたわけではないですから！！決して！！」

「……………」

何と勘違いしてんだか知らないけど。

……重い。

……食えるわけが無い。

「いや、あの、いいですよ？僕、今そんなに食欲ないですから」

ただでさえこんな可愛い子から物をもらうのも気が引けるのに、こんな名残惜しそうにされたらもうわけにはいかないだろう。もらったら男じゃねえ。

しかしその女子は笑顔で首を横に振る。

「いやいや、いいですよ。私困っている人がいると放つとけないんです」

「でもっ」

言っが先か、大きな腹の虫が鳴った。

もちろん僕のである。

女生徒はクスクスと笑う。

「ほら、受け取ってください」

そして、その両手にあった焼きそばパンを僕に押し付けてきた。

「いや、でも、悪いですよ!」

「いいです、いいです。それじゃ!」

手を振りながら女生徒は立ち去ろうとする。

「あつ! お金!」

僕は後ろから声をかける。

僕のそれは、天使のようなその女生徒に向けられたものだったのだが、女生徒は振り向くとそれはそれで魅力的な、しかし、さつきまでとは正反対の小悪魔的な笑顔を浮かべていた。

「じゃあ、そのうち何かおごってください、それで貸し借り無しと
いうことで。久重君^{ひさしげ}」

そう言つと女生徒は来た方向とは反対に小走りで行ってしまった。

……………。

その場に取り残される僕。

廊下は静寂に包まれ、遠くにある昇降口から他の生徒たちの話し
声が聞こえる。

——あれ?

「僕、名前言つたけ?」

僕の右手にはメロンパンだったもの。

左手にはグレート焼きそばパン。

僕はその女生徒が走っていった先を眺めていた。

東金凛々子02（前書き）

一章？↓<http://ncode.syosetu.com/n9717k/1/>

東金凜々子02

こういうことは初めに言っておかなければならないと思うから言うが。

僕に焼きそばパンをくれたこの女生徒は東金凜々子ではない。

彼女が東金凜々子であるのなら、それは僕にとって天にも昇る想いであり、砂漠の日の下でやっと見つけたオアシス。または、高速道路で強烈な尿意を我慢していたところでのサービスエリア。

……最後のはあまりふさわしくないかもしれない。

とにかく、その女生徒と東金凜々子はまったくの別人である。

あいつはもつと恐く、そして精錬された日本刀のように美しい刃のようだった。

だから、僕はあの事件に巻き込まれたのだ。

僕らの町を襲った連続殺人事件。

あいつと関わらなければ、それは日常のテレビの中での事件だったんだろう。

しかし、巻き込まれた。

あいつと関わったから。

結局あの女生徒は何者だったのかということだが、それについては僕の悪友とも呼ぶのだろう友人が知っていた。

「それ、清風^{きよかぜ}しほりだよ。『天使のような』ってんなら間違いないね」

幸村人^{ゆきむらひとし}一はそう言うと、パーマがかかった自慢の茶髪を指でいじりながら、堰を切ったように彼女について語り始めた。

「158センチ42キロ。C組のクラス委員長。入学して以来その愛らしいルックスでファンを増やし続け、三ヶ月が経った今や『恋人にしたいランキング』『妹にしたいランキング』『ミス・鳥高』の三冠を達成。しかし彼女をそこまでの地位に押し上げたのは、誰それかまわらず助けて回るシスターのような地道なボランティア活動と、困っている人を助けずにはいられないその性格である。好きなものは可愛いもの。しかしその分野は広く、普通の女子高校生が気持ち悪いと思うものも範囲内である。天使のような容姿と常に笑顔を絶やさない振る舞いから『ピュア・エンジェル』と呼ばれている。本分社新訳国語辞典参照……」

「——って辞書に載ってたのかよ!!そんな有名人!?!」

「嘘に決まってるんじゃない。こんな単純なギャグに引つかかるなんてバカだなあ!久重は」

「っわかってるよ!わざわざ合いの手を入れてやったんだろ!お前の辞書に突っ込みという言葉はないんかい!!」

「ハッハ!、辞書なんて買った事も無いって」

「載ってる以前の問題っ!?!」

女生徒を見送った後、僕は自分の教室に戻り、僕の席に向かって椅子を背もたれに寄りかかり、その姿勢のままコンビニ弁当を食べている幸村とアホな会話を繰り返していた。

「しかし、よく一個人の情報にそんなに興味が沸くな」

「感心したか?」

「いや、寒心はしたが……」

今のこいつに感服の念を抱く奴がいたら会ってみたい。

「それで、お前もエンジェルの施しを受けたわけか」

幸村がにやけながら問いかける。

清風しほり。

彼女からもらったグレート焼きそばパン(裏メニューなのか、僕は存在すら知らなかったが)をちょうど口に入れるところだった。

「ん。ああ、これな。おかげで午後から空腹には困らなさそうだけど、……なんだか悪いことしちゃったよな」

僕はグレート焼きそばパンを目線の高さまで上げ、清風さんのこれを渡したときの顔を思い出す。

『私困っている人がいると放つとけないんです』

最高の笑顔だったなあ。

「ああ、最悪だな」幸村はゆっくりと言う。

「人のやることじゃねえ」

「まさかの人間失格！？」

「お前の正体は鬼だ」

「鬼は人間って説もあるけどなあ！」

幸村は僕の言葉など聞こえていないように続ける。

「オレだったらそれをきっかけにアドレス聞いて、んで速攻スパイクをぶち込むけどな！」

「初対面でそんな事したら捕まるけどな」

ちなみに正確にはアタック。

どっちも意味は同じバレー用語。

「ていうかお前には無理だろ」

僕は突っ込む。

「何だよ！？オレのスパークングすごいんだぜ！？」

「勝手に笑顔ウルトラZに進化してんじゃねえよ。お前チキンだからアタックするどころか、アドレスも聞けないだろ」

「はっ！なめられたもんだ。オレもよ。これでも中学のときはアドレスリスナーと呼ばれた男なんだぜ」

「アドレスリスナーってラジオ聞いている人は大体そうだろ……っ！かそんな言葉はねえ！」

「まあ、いいんだよ。ところで、お前今まで知らなかったのか？清風の事」

「えっ？ああ、うん」

急な話題変更に僕は気の抜けた返事を返してしまう。

「えー、いくら友達少ないからって、なあ。あれだけの有名人を知らないって言うのはちよつと、なあ」

わざとらしく幸村は繰り返す。

「うるせえ！友達少ないのはお互い様だろう！」

「オレは少ないわけじゃないもん。あんまり関わらないだけー」

「……そういうのって自分が言うтусづけえかわいそうだな」

「いいんだよ！オレにはオレを愛してくれる女の子さえいてくれれば」

「いないだろ」

幸村一人。

極度の女好き。

軽度の男嫌い。

そして、最高のバカ。

この県内屈指の偏差値を誇るこの高校に入れたことは、学校の七不思議だとささやかれている（もちろん僕だけが）ほどにバカ。そのバカに何の縁かはわからないが入学して以来、僕は数少ない友人として扱われている。

「難儀な奴だな……」

「えっ？何時な奴？おいおい、オレが漢おとこになるのは真夜中だぜ！」

「お前童貞だろ」

「いいいいいきなりばらすんじゃねえよっ！！」

追記事項。

女好きだが——ヘタレ。

「そういえば、あの娘——清風さんだっけ。なんでか僕の名前知っていたんだよな」

僕は何らかの反応を求めて呟いてみる。

「そいつは妙だな。お前めちゃくちや地味なのに」

「派手を気取っているチキンよりマシじゃないか？」

「ああん？誰のことだ？」

おお……！どうやら本当にわからないらしい。

さすがミスターポジティブ。

「何にも接点無いのに何でだろうなあ」

もらった焼きそばパンを大きくほおばる。

「それは俺があいつに話したからだろう」

「！」

僕の背後。

机を挟んで座っている幸村の視線の先にその声の主はいた。

「クラス委員会で何度か隣になったからな。その時にお前の話題が出たんだ」

「足音を立てないで背後に回るんじゃないやねえよ！！忍者かお前は！？」

「オレも気付かなかったぜ……！宇佐美……！！」

いや、お前の位置からは見えるんだから気付けよ。

宇佐美^{うさみけい} 慶。

寺の息子。

幼いころに両親をなくしていて、それ以来お祖父さんと二人暮らし。それが作用してか、高校生とは思えない落ち着きを持っている。

B組クラス委員も務めており、僕にとってはかなり頼れる友人である（バカはまったく頼れない）

身長は高く、ガタイも良い。剣道部に入っており、全国大会に出るほどの腕前らしい（春の新人戦で弱小のうちの剣道部から、関東大会まで進んだ生徒がでたというのは一時期ニュースになっていた）そんなステータスで黒短髪が似合う好青年なのだから、当然もてるのだが、唯一の弱点が。

究極。

完全的に。

鈍感なのである。

まあ、常に何考えてんだかわからないところはあるが、それにしても酷いのだ。

ある日のことだった。

関東大会出場の噂を聞きつけてうちのクラスに何人が違うクラスの女子が来た事があった。

アドレスでも聞いてお近づきになろうとしたらしいのだが。

この鈍感男は言った。

「お前たちとメールする理由が無い。そのための用が無いからな。だからアドレスをわざわざ教える必要も無いだろう？」

あの時は、まるで教室が凍りついたようだった。

——そういえば、あの時なぜか僕があの娘たちに取り繕つくろって、あいつはその間、まるで興味がなさそうに自分の席で読書してたんだ。ありえないよな……。

話を戻す。

「で、お前は何で清風さんに僕の話なんてしたんだ？」
宇佐美は無表情で言う。

「俺から話したわけじゃない。あっちが聞いてきたんだ」
何？

それは、完全に予想していなかった答えだった。

清風さんが僕のことを？

あの可愛い子が？

天使と証されるあの子が？

なんだろう！すげえうれしい！

一気に惚れてしまいそうだぜ！！

「ちっちなみに！それは一体どういう——」

「『あの赤縁眼鏡をかけている幸の薄そうな、宇佐美君といつも一緒にいる男の子ってなんていう子？』って聞かれたんだ」

「一気に夢をぶち壊すなあっ！！幸の薄そうになって何だよ！？」

「ハッハッ！さすが地味っ子だなあ、お前にピツタシなイメージだぜ！！……プフフ！」

幸村が腹を抱えてこれ以上笑わせるなと右手で合図している。

「言つとくがお前はいつも宇佐美君と一緒にいる子にカウントされ

てすらいなからな」

「ッ！！なにい！？」

「ああ、お前のこと忘れてた。……まあでもあっちも聞きたいのは久重のことだけだったみたいだぞ」

そう言つと、宇佐美は幸村の隣の席に座り、持っていたハードカバーの本を開いた。

「……………ちきしょおおう！！！！オレも文学少年になってやるううう！！！！」

友達扱いすらされなかったバカは、そう叫びながら廊下を出て行った。

「……………図書室にでも行くのかな？」

僕は廊下を眺めて宇佐美に聞く。

「ならすぐ帰ってくるな」

「えっ何で？」

本に目を落としたまま、変わらない口調で宇佐美は言った。

「高校うちの図書室には漫画は無いからな」

東金凛々子03（前書き）

一章？↓<http://ncode.syosetu.com/n9717k/1/>

東金凜々子03

さて、そろそろ東金凜々子はどこへ行った？と突っ込みが入りそうだが、しかし待ってもらいたい。

物事には順序があつて。

あいつについては順を追つて説明しないとあの事件に結びつかないのだ。

——いや、違うか。

あいつそのものが事件だったんだ。

「そういえば、お前は今までどこへ行つていたんだ？」

幸村がいなくなり静かになった教室の一角で、僕は読書にふけている宇佐美にそう聞いた。

「ああ、別に。たいしたことじゃないさ。ただ——」宇佐美は続けた。

「校内にある二つの自販機を破壊した犯人が茶髪でパーマをかけていた、という生徒の目撃証言があつてな。……まあそれについてクラスを代表して職員室に呼ばれただけだ」

「あれの犯人はやっぱりあいつかあッ!!」

回し蹴りによって側面に大きなへこみができた、我が校唯一の自販機。

やっぱりバカをやる犯人はバカなのだ。

ていうか、クラス代表というより、いつも一緒にいる保護者代わりとして、宇佐美は職員室に呼ばれたんじゃないのか!?

「あいつのせいで、僕は水道水でパンを食べるはめになったんだぞ！」

「そうか、そいつは大変だったな」

僕の言葉を聞き、宇佐美は微笑む。

分厚いハードカバーの本を閉じ、横にあったカバンの中から水筒と紙コップを二つ出す。

「お前も飲め」

そう言うと、水筒から冷たそうな麦茶を注ぎ、僕に差し出す。

「お、サンキュ」

僕は紙コップを受け取る。

麦茶を啜^{すす}る僕を見て、宇佐美はまた微笑む。

それは人によつては笑っているとは表現できないかもしれない微弱なものかもしれない。

けれど、宇佐美は間違いなく笑っていた。

僕にはわかるのだ。

宇佐美とは小学校からの付き合いである。

当時、三年生だった僕らは同じクラスに属していたが、特に友達と呼べるほど親しい仲ではなかった。

せいぜい知り合い。

ただのクラスメイト。

その程度の関係だったんだと思う。

僕にはそのとき、一緒に遊ぶ友達はほどほどにいたし。宇佐美は今と変わらず、無口で、あまり人を寄せ付けないオーラを出していたからである。

ある日、どういうわけかは覚えていないが、たしか僕は読書している宇佐美に自分から話しかけた。

何か用があったのかもしれないし、ただの気まぐれだったのかもしれない。

だが、とにかく、僕は自分から話しかけていた。

会話の内容は細かく覚えている。

その本面白い？という僕の問いかけに対して、……興味深い、と宇佐美は答え。どんな話？という問いかけに、……人が死ぬ話、と答えた。

ふうん、と僕がつまらなそうに言うと、……一回読んだものだから読みたいのなら貸す、と宇佐美は本を僕に向かって差し出した。正直、こんな分厚い本は辞書以外に読んだことは無かったし、あまり興味も無かった。

しかし、読書中にしつこく質問したのは自分だったので、断ることもできず、感謝の意を告げその本を借りた。

その日の放課後、友達はみんな用事があったので、僕は道草せずに帰宅した。

家に帰ると、両親は共働きで、妹はまだ帰っていなかったの、僕は一人だった。

することも無く、暇をもてあましているとランドセルの中に、あの分厚い本があるのを思い出した。

もちろん、学校から宿題も出されていたが、頭の中で天秤にかければ興味があるのは、あの無口で何を考えているのかわからない宇佐美が読んでいた本の方だった。

僕はランドセルから『鬼人』と書いてあるその本を引っ張り出し、表紙をめくった。

それとの出会いは、まさに衝撃的であった。

最初は退屈だったが読み進めていくにつれてその重厚な物語に引き込まれ、ページをめくる手が止まらなくなった。

僕はこんなものが世の中には存在したのか！と感心し、そしてそれを今まで知らなかったことに後悔をした。

次の日、僕は宇佐美にその本について熱く語った。

周りから見たら、それは僕が一方的に話しかけているだけだったろう。

宇佐美は眉一つ動かさない、いつもの無表情だった。

しかし、『あそこには驚かされた』『あの人のあの行動はかっこよかった』など、僕の言うことをしっかり聞いて、その全てに頷いてくれた。

そして時より、誰にも見せない笑顔を僕に見せた。

僕と宇佐美はそれ以来、親友になった。

結局、昼休みが終わり、五時間目が始まる前には幸村はもう教室に戻ってきて机に突っ伏していた。

どうやら、五時間目の生物は最初から寝るつもりらしい。

次は教室では無く、生物実験室での授業なのだが。

面白いから放っておこう。

宇佐美と一緒に実験室へ向かう。

ちなみに宇佐美はそのことについてスルーである。

授業開始直後――。

「デメエ！久重え！何でオレを起こさねんだよっ！」

生物の老教師に首根っこをつかまれて幸村は連れて来られた。

そして僕を見るなり、幸村は暴れ始めた。

「静かにしろ幸村。お前が勝手に寝ていたんだろう」

老教師によって制される。

さすが、年の功というか、扱いに慣れていらっしやる。

「そっいえば」老教師は思い出したように言う。

「学校の自販機を壊したのもお前だって話だったな。まったく、少しは落ち着いて生活できるのか」

それを聞いて、ラグビー部と野球部の数名がなに？と幸村に睨みをきかせた。

「おいおい、どういうことだ。幸村あ？」

「俺たちの大事な水分補給源に何してくれてんだよ。ああん！？」

「ちょっとツラ貸せやあつ!!」

「あつあれ? ちょっとと?」

立ち上がったラグビー部たちに囲まれる老教師と幸村。

「こらこら、お前たち。授業を始めるぞ。席に着かんか」

「そつそつだよ。おちつこつ、ね」

落ち着いた様子の老教師に比べ、幸村は明らかにテンパっていた。
「先生」

ラグビー部の一人が言い出る。

「僕たち、ちょっとトイレに行きたいんですけど」

老教師は、うゝんとしばらく悩む。

やがて、

「よし行つて来い」

数名の申し出を受け入れた。

「おい! ジジイ!! こらあーッ!!」

引きずられていく幸村。

—— やれやれ。

僕の出番か。

「おい、お前ら!」

僕はそいつらを呼び止めた。

「ああん?」

「何だよ、久重え。なんか文句あんの?」

ラグビー部たちは今度は僕を睨む。

「久重え! 助けてくれっ!」

足元にすりつく幸村。

まったく、余計な体力使わせやがって、こいつはよ。

—— 放っておけないんだよ。

「これも使ってくれ」

僕は暑さで砂糖がとけ、触ったらべたべたになるであろうメロンパンであったものをそいつらに手渡す。

「久重えっ! お前友達じゃなかったのかよっ!!」

幸村は僕に悲痛の叫びをあげる。

僕はそんな足元の幸村を見下して言う。

「そんな奴いないだろ」

廊下を引きずられて行く幸村の叫び声はだんだんと聞こえなくな
っていった。

六時間目の現国が終わり、HRが始まる頃。

バカは帰ってきた。

メロンパン（であつたもの）に顔を埋めて。

「お前……すごいな。前見えんのかそれ？」

「ふぁいふおのふいふおふおふおヴぁふおへふぁふおっ!!」

まるで、テレビでよく見かけるパイ投げ状態である。

何言つてんのかわからんけど。

「『最初の一言がそれかよ!!』と言っているな」

そしてお前はなぜわかる。

むしゃむしゃと中からメロンパンを食べきると（まるでパックマ

ンのようだ）幸村は言う。

「お前、今回ばかりは酷すぎるぞ」

「えっメロンパンの味が？」

「違いよ!! いや、違うはないけど……」

幸村は渋い表情を浮かべている。

そんなにまずかったか。

あれ？

でも砂糖溶けたただけだから、味は変わらないはずなのに。

「なんかすっげえすっぱかった」

……………。

パンも発売禁止にされたら困るから黙っておこう。

こいつだったら食中毒も起こさなそうだし。

そんな会話をしている中、教室のドアが勢い良く開かれた。

「おい、お前ら席に着け。大事な話があるからな」

そこから体育教師である僕のクラスの担任が教室に入ってくる。だが、いつもの陽気な顔とは違い、神妙な面持ちだ。

それを見て全員が慌てて席に着いた。

僕たちもすぐに席に着く。

「最近、この辺で起きてた通り魔のことなんだがな」
通り魔。

それは最近、この町に出没していた不審者の話である。

身長は男にしてはやや低く、痩せ型。

髪は長く、後ろで結んでおり。

いずれの犯行のときも、赤い野球帽を被っていたと、目撃者談。出沒地域はうちの高校の近くにある川の遊歩道。

被害者は、女子生徒が三人、近くの女子中学生が一人の計四人。いずれも日が落ちてからの犯行だった。

だが通り魔と言っても、実際に怪我をした者はおらず、被害者の話によれば、その『赤帽子』はただ刃物を見せてゆっくりと近づいてきただけであるという。

しかし、それでも念を押して、学校側は厳重注意と集団下校を生徒たちに義務付けていた。

——のだが。

何かあったのだろうか？

担任の様子を見てそう伺える。

嫌な予感がした。

担任は間を取って小声で、しかし生徒たち全員に聞こえるような重く、低い声で、それを伝えた。

「……ついに犠牲者が出ました」

東金凛々子04（前書き）

一章？↓<http://ncode.syosetu.com/n9717k/1/>

東金凛々子 04

目が覚めた時、僕は犬のように地面に寝転び、数多の星を眺めていた。

周りは土臭い。

脇では水が流れる音が聞こえる。

なぜこのような場所にいるのだろうか。

思い出せない。

僕は思考した。

そして、この答えにたどり着くには五秒かからなかった。

「東金……凛々子」
そう。

自分以外の人間を見下しているような冷ややかな目を持つあの女。

美しい長い黒髪と神秘的な品性を擁するあの女。

僕はあいつに出会ったはずなのだ。

殺人事件が起きた、この土手で。

「犠牲者……」

教室が担任の言葉に静まり返る中、僕は誰にも聞こえない程度に

呟いた。

それは、おそらく。

耳を疑いたくなることだが。

文字通りの意味なんだろう。

ド田舎とは言えないが、確実に絶対的に都会ではない事は断言できるこの町。

町で一番の犯罪と言えば住居不法進入くらいの平和な町。

そんな僕らの町で起こってしまった。

――殺人事件。

そんなもの、TVでは日常的だが。

僕にとってそれはTVの中でしか存在しないようなもので。

だから、こんな身近な場所で人が殺されたということに酷く違和感があり、とてもじゃないけど信じられなかった。

「橋の裏側」

担任は言う。

「仏さんは喉を裂かれた後、橋の裏側に吊るされていたそうだ。今日のお昼ごろ、近所を散歩していたご老人に発見されたらしい」

その橋は学校の通学路である。

だから、多くの生徒が今朝も通っていたはずである。

僕もその橋を利用して学校に来ていた。

死体が吊るされていたかも知れない橋の上を。

全身に鳥肌が立つ。

「かわいそうにな……。まだ十九歳くらいの女の子、いや、女の子とは言わないかもしれないけどな。それくらいの年の子らしい」担任はため息をつく。

「いいか、お前ら。今日、明日は警察の許可無くその橋は通れないから。穂山方面の生徒は迂回して帰るように。わかったな」

穂山の人間がああ橋を使わずに迂回して帰るとなるといつもの三倍は歩かなくてはならないだろう。

当然、大ブーイングが起きるかと思いきや、教室では一言も文句を言う奴は出なかった。

みんな、わかっていた。

その犯人の異常性を。

だから、黙って従うのだ。

言っても無駄だから。

しかし、その沈黙を破ったのはやはりバカだった。

「おいおい！その通り魔が狙ってんのは女だけなんだろう？じゃあ男

は関係ねえじゃん！」

その一言は教室を気まずい雰囲気にした。

それはみんな、思っていたことなのだ。

被害者は四人、今回で五人目だが、全て女。

よって、その犯人は男にはおそらく、まず安心であることを。

男に対して橋を封鎖する意味は皆無であることを。

それはみんな感じていたことであつた。

しかし、人が一人死んでいるのだ。警戒するのも当たり前だと、

それくらい高校生にもなつたらわかりそうなものだが。

まったくこいつは本当にバカである。

だが。

「黙っている、人。」

シンとなつた教室で口を切つたのは無口なクラス委員の宇佐美であつた。

そのドスの利いた言葉に、さすがの幸村でも体をビクツと震わせそれ以上は何も言わずに——いや、言えずに席に着いた。

そして、また教室は沈黙に包まれた。

「まあ、とにかく今日は早く帰るように。部活も全校休止だ。日直、号令」

きつかけを作るように担任がそう言うと、慌てて日直が号令をかける。

そして、そのまま今日は放課になつた。

……………。

下校しようと校門に押し寄せる大量の生徒を、僕は四階の窓から見下ろしていた。

「なあ、帰らないのかよお」

幸村が赤ん坊が駄々をこねるように机をがたがた揺らしている。

「僕は人がたくさんいるところが無理なんだよ、頭痛くなるから。人がいなくなつてからでもいいだろ、まだ日差しが強いし」

僕の隣、宇佐美は窓際に寄りかかってハードカバーの本を読んでいた。

真夏の温い風でも宇佐美にかかれれば日本のさわやかな夏の風の様だった。

バックのオレンジ色の情景も様になっていた。

「ええー！早く帰って、こうクイツとやろうぜえ！」

「ええい、うるさい！引っ付くな暑苦しい！」

無理やり、腰にまとわり付いてきた幸村をひっぱりがす。

もう昼ではないとは言え、楽に三十度は越えてんだぞこのやろう。
「暇なら、期末テストの勉強でもしてろっ！お前どうせヤバイんだろ」

「お前も頭悪いじゃん。その眼鏡は伊達なんだろう」

「……確かに僕は頭が良い方ではないがお前ほどじゃない！それにこの眼鏡はちゃんと度が入っている！！読者を混乱させるようなことを言うな！」

ちなみに僕の両目の裸眼の視力は0.1。

酷い乱視なので、眼鏡がないとスーパールの値札すら見えない。

幸村は不満そうな顔をすると机に突っ伏し、寝る体勢に入った。

……こんなに暑いのに良く寝れるものだな。

しかし、そう考えていたが数秒後。幸村は突然ガバツと起き上がると僕に言った。

「そうだ！テストといえばお前、三年の中間一位の奴知ってるか！？」

清風さんを知らなかった僕がそんなの知っているわけが無いだろう。

僕は、さあと答える。

「そうだよなあ、知らないよなあ、清風しほりも知らないんだもんなあ」

……………。

なんか、すげえむかつく。

「で、その学年一位がどうしたって？」

僕はいらつくのを隠さずに聞いた。

「おお、そうそう。オレさあ、そいつを見てきたのよ、三年の教室まで行つて」

幸村は床を指差す。

「なんでそんな面倒くさいことを……」

「いや、学校始まって以来の秀才って言われる女がどんなガリベンなのか見てみたくてよ。……そしたら、オレはおったまげたね！これがエライベツピンさんなんだ！」

お前はドラクエの村人かつーの。

今時の高校生はそんな言葉使わねえ。

「ていうか、学校始まって以来の秀才って、その人そんなに頭いいのか。俺はそっちのほうが驚きだ」

「うん？まあそうらしいけど、そんなの毎年言っているようなもんじゃん。そんなことはどうでもいいのよ」

どうやら幸村にとってはその人の経歴よりもその人本人に興味があるようだった。

毎年更新されているのか学校の秀才は。

「そうだなあ、でも可愛い感じではなかったな、美人だったけど。どっちかつーとカッコいい感じ。清風と比べると、まさに真虐まぎやくって感じた」

「真に虐めるのか。そりゃあ清風さんとは違うな」

どんなSなんだよ。

正しくは真逆。

決して筆者の打ち間違いではない。

「でもな」幸村は間を持たしてボソツと言った。

「……恐かったなあ」

「恐かった？」

幸村の予想外の言葉に僕は聞き返す。

「ああ、なんか全身から殺気が出ているみたいな感じ。友達もいな

いみたいだったし。あの目なんて、平気で人を殺しそうなものだったんだぜ。もしにらまれたらオレ震え上がっちゃうよ」

「ふうん……」

珍しい。

あの見栄っ張りの幸村が素直に負けを認めるだなんて。

それほど人物なんだろうか。

ちょっと気になる。

「ちなみに名前は？」

僕は尋ねる。

幸村は、ああ忘れてた、という口の動きをした後にその名を言った。

「東金凜々子」

幸村はそう言うとその後は何も話さなかった。

僕はいつも、つくづく思う。

この時の僕はなぜこの女に興味を持ってしまったんだろう。ここで少しでも興味を持たなければ、あんな事にはならなかったんじゃないか？

——あんな事には。

「久重、もうそろそろいいだろう。だいぶ人の流れは下火になったようだぞ。俺も今日は早く帰りたいんだ」

いつの間にか本を読み終わっていた宇佐美が横から顔を覗かせる。

「あつまジで？じゃあ帰ろうぜ」

「その気変わりの速さは一体何なんだっ！？赤縁メガネっ！！オレの意見は無視しといて！！」

「さて、じゃあ帰るか宇佐美」

「うむ」

「お願い、オレを無視しないで……」

涙目になっていた。

本当に情けない奴だ。

僕たちは教室を出て階段を下りた。

昇降口には人はもう数えるほどしかおらず、これなら持病の頭痛も起きないであろう人数だった。

三人で一年の下駄箱に向かった。

そこではあの天使が外履きに履き替えているところであつた。

「あつ宇佐美君！それに、久重君。さっきはどういたしました」

「あつ！清風さん。さっきはどうも。助かったよ」

清風しほり。

この学校の天使、あるいは女神に属している人間。

「清風は今帰りか」

宇佐美は尋ねる。

「うん。ちよつと事務職員のおじさんと一緒に中庭で草むしりしてたら遅くなつちやつた。宇佐美君たちこそずいぶん遅いね」

事務職員のおじさんと一緒に草むしりをしていることをずいぶんさらりと言つたな……。たぶん、彼女にとって自然なことなんだろうが……。

花の女子高生が自ら草を摘んでどうする。

「こいつの持病でな。あまり人ごみには出れないんだ」

宇佐美は僕の病気についてあまり触れずに説明する。

「持病？それって重い病気なの！？久重君！」

清風さんは僕の顔に、鼻が触れ合いそうなんじゃないかと思うくらいにおもいつき顔を近づける。

近い！

近すぎる！

「いっいや少し頭痛するだけだよ！小さいころからだし！それによつぽどの過密空間じゃなければ大丈夫だけどつ！」

あまりに心配されてしまったので、なんか慌てて対応してしまつた。

意外と自分はあるがり症なのかもしれない。

ああ、でも清風さんにこんだけ近づかれてテンパらない奴なんていないか。

……宇佐美を除いて。

「そっか、安心したよ。でもなんか助けになれることがあったら言ってね！力になるから」

清風さんは親指をグツと立てる。

「うん……ありがとう」

でも、僕の病氣って他人がどうこうできるものじゃあないんだけどな……。

「そっいえば」

僕はふと閃く。

「清風さん」

「しほりでいいよ久重君っ」

ええ、えっと。

女の子を名前で呼ぶのには勇気がいるな。

「えと、じゃあ、しほりさん。東金凜々子って先輩についてなんか知ってる？なんかずいぶん恐い人らしいんだけど」

学園のシスター、清風さんなら東金凜々子について何か知っているかも。

「東金凜々子？」

清風さんは記憶を探っている様だった。

うーんとしばらく唸るが。

やがて。

「……ごめん、それ多分、中間テスト三学年一位の東金凜々子さんだとは思っただけど……ごめんなさい。話したこともないし、特に接点が無いから……」

そう言つと、清風さんは本当に申し訳なさそうに頭を深々と下げた。

そして、下げだした頭は止まることを知らず、両手両膝を付いた

形で地面に額を擦り付けていた。

ていうか、土下座だった。

「いやいやいや！そんな謝んなくてもいいよっ！やめて！こっちこそごめんなさいっ！」

清風しほり。

この学校の天使、あるいは女神に属している人間。

——責任感是人三倍である。

「……じゃあ、私はここで」

校門を出て、最初の交差点。

僕たちは右に。

しほりさんは左に曲がった。

「ああ、またな。清風」

「あつ焼きそばパンのお礼はいつか必ず！」

しほりさんはあの時と同じようにクスクスと笑うと。

「うん……。お願いね。久重君」

そう言って、手を振りながら駅方面の道へ歩いていった。

しかし、その背中にはいつもの元気が感じられなかった。

足取りもおぼつかないものである。

「また、悪いことしちゃったな……」

僕は学園の天使をへこませたことに対し、それなりに責任を感じていた。

「ん、どういうことだ？」

「お前は、自分に素直でいいよな……」

宇佐美は本当にわかっていない様だった。

「なあ」

「ああ、どうしよう。パンのお礼と共にお詫びのプレゼントも必要になってくるぞ。こりゃあ」

「なあ」

「っーか、あれはあれで困った性格だよな。いつもああなのかな？」

「なあつてば!!」

「うるせえな!こっちは校内中の男子から敵視されるかどうかの瀬戸際なんだよ!」

「オレのこと忘れてませんかっ!?!」

「あれ……君、いつからいたっけ?」

「オレ透明人間っ!?!」

こいつの存在をすっかり忘れていた。

ていうか、しほりさんが最初から気付いてなかった。

「お前、擬態でもしてた?」

「できねえよっ!今日のお前、俺に対して酷すぎるぞ!」

「今日より明日。明日より明後日だな!」

「そんな向上心はいらないっ!?!」

幸村は叫んだ。

家に帰った時には、もう日が暮れかけていた。

僕の家と学校の位置関係は、あの事件のあった川を挟んでいるので、かなり迂回して帰宅する羽目になった。

途中、幸村が橋を殺人現場を見に行こうと橋に向かって突入を試みて警官に捕まったが、僕たちは他人の振りをして帰ってきた。

買い物にでも行くかな。

両親は共働きで夜遅くまで帰ってこない。

だから基本的に夕飯は妹と二人きり。

作るのは僕。

別に文句は無い。

もともと、料理するのが好きだったし、スーパーでの買い物も僕は大好きである。

割引商品を見つけたときのあのちょっとした幸福感。

あれほど気持ちいいものも無い。

僕は鞆を置くなり制服からＴシャツとジーンズに着替えて、そのまま座ることなく玄関に戻った。

革靴の代わりにスニーカーに履き換え、ドアノブに手を掛ける。

——そこからだ。

——僕の非日常。

その瞬間から始まったのだ。

何も気にすることなく。

東金凛々子のこととそのときはすっかり忘れて、気にすることもしでせずに。

僕は非日常へと。

足を踏み入れた。

東金凛々子05（前書き）

一章？↓<http://ncode.syosetu.com/n9717k/1/>

東金凛々子05

いいかげん星空にも見飽きた僕はゆっくり体を起こした。
体がギシギシと痛んだ。普段運動なんかしないのに突然走ったか
らだった。

七月七日、今日の天気は快晴。星が良く見える絶好の七夕日和だ。
しかし織姫と彦星が逢遇する本日、僕は鬼と出会ってしまった。
東金凛々子。

あいつは殺人事件が起きたこの土手で僕を襲いやがった。
月明かりの反射が美しい、まるで通り魔が持つような大きなナイ
フで。

僕は明日学校に行けるのだろうか。

体は痛いがそんなことは問題ではない。

あいつが登校しているかもしれない学校に行けるのだろうか。も
しかしたら次こそ出会ったら殺されるんじゃないだろうか。

そんなことを考えつつ僕は土手の階段を登り始めた。

——帰ろう。

家では妹が腹を空かして待っているはずだ。

すっかり夜も更けたというのに、この暑さはやわらぐことはない
ようだ。

スーパー沢村は僕の行きつけの家から徒歩五分内にあるスーパ
ーである。

僕が知っている店の中では一番安く、品揃えも豊富で、近くに住
む主婦はたいていここを利用して食卓を彩っているだろう。

実はそこで買い物をするのが僕の一日の楽しみだったりする。

そのスーパー沢村からレジ袋を提げて出てきた時にはもう日は落ちていて、僕は品定めに時間をかけ過ぎたことを知る。

「やべえ、遅くなっちまった。裕香、腹空かしてるだろうな」

裕香は僕の二個下の妹である。

背は僕よりも十五センチほど小さく、かなり小柄なのだが。結構図太い神経の持ち主であり、両親の親バカを利用して僕を平気で顎で使ってくる。

なので家での兄妹としての地位は完全に逆転してしまっている。

兄としては情けない限りだ。

最近髪はストレートパーマをかけたか、顔が大人びてきたりして昔に比べ外見が女らしくなった。シスコンだと思われるかもしれないが、我が妹ながらかなりかわいいのである。

だから中学校でちょっと——いや、かなりもてるらしく、ここ最近明らかに調子に乗っているの、で、どんな性格が腹黒くなっているようで、兄として僕は頭を悩ましている。

商店街は帰宅途中のサラリーマンやOL、部活帰りの中高生で溢れていた。

時刻は七時を回ったところだと思う。僕は時計を持たない主義なので時間を確認するときはいつも携帯で事を済ましているが、今はその携帯も家の鞆の中である。

よって体内時計に頼るしかないのだが、もしこれが正確なら家に帰ってそれから夕飯を作り始め、できるときには八時過ぎになってしまう。そこまで、あの裕香が我慢できるとは思えない。

思えないが。

僕には家に帰って夕飯を作る以外、選択肢は無い。

家の方向に足を進め始める。

その直後、眼前を女性がすれ違った。

そんな事は日常的に珍しいことでも何でも無かったが、僕はその女性に見覚えがあった。いや、見覚えは無い。聞いたただけだ。

『なんか全身から殺気が出ているみたいない感じ。友達もいないみたいだったし。もしにらまれたらオレ震え上がっちゃうよ』

そうあのバカは言っていた。

美しい長い黒髪と神秘的な品性。

そして、睨まれたら怪我をするんじゃないかと思う、刃のような鋭い目つき。

僕にはその女性を直感的に彼女だとわかった。

なるほど、そりゃ震えもする。

その女性は平気で人を殺しそうな深い黒の目をしていた。

東金凜々子だ……！

振り返ってその姿を確認する。

しかし、すでにその姿は無かった。

熱湯の中に氷を入れたがごとく、もともとそこに無かったかのように、空気に混じって消えてしまったんじゃないかと思うほど瞬間的な出来事であった。

だが、すぐにそれは勘違いだと気付く。

僕の真横の裏路地に彼女はいた。十メートルほど進んだところであつた。

その先には、階段。

それはマンションでもなければビルのもでもない。

あの殺人事件があつた土手の遊歩道に繋がるものであつた。

警察の姿はもう無かつた。今日の現場検証はもう終わったということだろう。

……危ないんじゃないか？

被害者は全員女で、しかも今日発見された死体は十九歳くらいだと言っていた。

それは東金凜々子にも該当することであつた。

もし犯人のターゲットがそれくらいの年頃の女子ならば、しかもまだ犯人が土手近くに 있는 あるいは周辺に住んでいるのだとしたら、それは自殺行為だろう。

僕は夕飯のことなど忘れ、気付かないうちに後をつけていた。

僕は東金凜々子との間に十メートルの距離を保ったまま歩いた。それは喧嘩をした恋人同士にも見えるし、たまたま歩いている方向が同じな他人にも見えた。あるいは、ストーカー。

最後だけは本当に避けたいものなのだが、残念ながらこれらの中で今の僕に一番近いのはこれだろう。

「僕は何をしているんだ……」

自分が情けなくなってきた。しかしもし今、僕が帰ってしまったてその後でこの人が犯人に襲われでもしたら、一生僕は自責の念に苦しまれることだろう。

それに比べたらストーカー扱いなんてたいしたリスクではない、……はず。

僕はため息をつく。

彼女に何とかここが危ないという事を伝えることができればいいのだが。

——ん？

僕は思いつく。

「あの人に話しかければいい事なんじゃないのか？」

僕は数多の星が浮かぶ夜空を見上げて呟く。

なんで、その方法を思いつかなかった！？

最初からやれっての！！

いや、後悔している場合ではない。そうと決まればこの微妙な距離を埋めなければ。

僕は意を決して話しかけようと、視線を空から前にいる東金凜々子に移す。

しかし、そこに彼女の姿は無い。

「また！？」

今度は口に出して驚いた。彼女には瞬間移動機能でも付いている

のだろうか。

しかし、その考えはまた否定される。

僕側から見て左側の川のほとり。小石が散らばっているそこに彼女は降りていた。

そして、殺人事件が起きたのとは別の橋に向かって歩いていった。

僕より低い地点にいたのでまるで消えたように見えたのだ。

僕も土手を降り、話しかけるべく急いでかける。

だが、前にいる彼女は橋の下に差し当たり、潜り抜け、そしてまた土手に戻るように右に折れた。

これでは結局元の場所に戻るだけだ。

何がしたいんだ。あの女は。

そう毒づきながら僕は彼女が通った道筋をまるでアリの行進のように、駆け足で追いかけた。スーパールのビニル袋が走るのに邪魔だった。

そして彼女が右に曲がったそこを僕も同じく曲がる。

——一瞬のことだった。

僕が橋の下から顔を出した直後、ものすごい速さで僕の耳元を何かがかすめる。

僕の、視力0・1の二つの目が見間違っていないければ、それは刃渡り十五センチほどはあるうサバイバルナイフだった。

それを持っている手から、腕、肩、そして顔を順にスクロールして、刮目した。

美しい長い黒髪が風で巻き上げられたように広がり、僕の視界を支配した。

その中で僕は彼女と目が合う。

平気で人を殺しそうなその目と。

——一体僕の身に何が起こっている。

「あなた」

気品に満ちた、凜としている声が僕に呼びかける。

「そういった行為をするというのは、私に殺されても別にかまわな

いといった覚悟があつてのことなのかしら」

その瞬間、僕は気付いた。

これは罠^{トラップ}だったと。奇襲するためにわざと僕の視界から外れて、僕を誘い込んだのだと。

東金凛々子。

こいつはもしかしたら人を殺したことがあるのかも知れない。そう思わせるほどの殺気と抑圧だった。

深く黒い瞳は確実に僕に殺意を向けていた。

おいおい、幸村さんよお。あんたは間違つてねえよ！こいつは正に真虐じゃねえか！？

「いついや！？待つてくれ！！」僕は喉から絞りだすように声を上げた。

「別にストーカーとかじゃないから！！僕はただ——」

言い終える前に東金が言う。

「ストーカー……じゃない……？あら、そう。なら余計あなたを逃がすわけにはいかなかったわね」

「なんでだっ！？」

腹から叫ぶ。

サバイバルナイフはまだ僕の顔の横に存在している。

「だってストーカーで無いというのなら、さしずめ次の獲物を探していたんでしょ」

次の。

獲物？

どういうことだ。

東金は口元を上げ、笑顔を浮かべた。しかし、それはいい印象とは到底呼べる代物ではなかった。

そして続けて言った。

「そうなんでしょ。ねえ、赤帽子さん」

言いが先か動くが先か、彼女は僕の横にあったサバイバルナイフを振り上げ、肩にめがけそれを下ろした。

僕は反射的に手で顔を覆い隠す。

切られた感触はあった。

しかし、まったく痛くは無い。

僕が恐る恐る目を開けると、ナイフはたしかに切っていた。だが、切られていたのは偶然僕の手にあった食材がたくさん入ったスーパーのビニル袋である。

彼女の動きが一瞬止まる。

チャンスだ。

僕は持てる力の全てを使って、彼女に体当たりをした。

東金はバランスを崩し斜面になっている土手に倒される。

その隙に僕は今来た道を全力で走った。

無我夢中に走った。

もう歩けなくなってもいいと考えるほどだった。

そして、どれくらい走ったのかわからなくなるくらいになってから、僕は走るのをやめた。

汗が顔を伝って顎から落ち、地面を濡らす。

後方を確認した。

あいつの姿は見えない。

助かった――。

僕は急に全身の力が抜けて、地面に座り込み、そのまま寝転んだ。空には星がたくさん浮かんでいた。

「なんなんだあいつはよ……」

そうつぶやいて僕は思い出す。

――赤帽子。

それはおそらくあの通り魔――改め、殺人犯のことを言っているのだろう。

っそうか。

僕はそいつを警戒して後をつけていたというのに、よりもよつてそいつに間違われたって訳か。

まったく、笑いもんだ。

僕は一人でくっくくと笑う。

人はあまりの非現実空間に出されると笑い出すというのはどうやら本当らしい。

だって、そうだろう。いきなり初対面の女にナイフで殺されかけるなんて、それこそ通り魔だ。非日常過ぎる。

それから体が落ちて着くほどの時間が経ち、ようやく帰ろうと土手の階段を登り、僕は気付いた。

いや、たいしたことではないのだが。

食材が入ったビニル袋が無いことを。

東金凛々子06（前書き）

一章？↓<http://ncode.syosetu.com/n9717k/1/>

東金凜々子 06

七月八日、昨日ほどではないが十分に暑い今日この頃。

四時間目を回っても僕はまだ生存していた。

昨日、買い物物のビニル袋を失った僕は、仕方なく駅前牛井屋でテイクアウトをした。

妹の裕香からはかなり文句を言われたが、口喧嘩する気力も僕には無かった。

そのまま、僕は寝た。

あれだけのことがあつてので、今日、学校に来ようかどうかはさすがに迷った――が結局来る事にした。

その理由の一つに、昨日の彼女が東金凜々子では無いかもいれなかったからだ。

昨日はその女性を東金凜々子だと信じきっていたが、後になって冷静に考えてみると、あの時僕には彼女を東金凜々子だと証明できるものが無かった。

そんな曖昧なものに命の危険を感じて、学費を無駄にするのはバカらしいと考えたのである。

そもそも、もし彼女が東金凜々子としても、あれはあっちの勘違いから起きたのだから話せば和解できるはずである。

…… たぶん。

「よし終わったあ、昼飯どうすんだ!？」

幸村がいつものテンションで話しかけてくる。

「どっかのバカが自販機ぶっ壊したからな。学食だよ」

飲み物無しではパンは辛いと昨日学習したのである。

「うう!……へっ!どうせそうやってみんなオレのせいだと思ってるんだろ」

「思ってたろってかそうなんだろ」

「違うね!あれはオレのせいじゃない!オレはただちようと自販機

の前にいた一年に『ちよつとボクの分も買っておいてくれるかなあ、お金は今度払うから』って交渉してたら、後ろで並んでた二年生が『知り合いでも無い奴にたかるな』って言ってきやがったんだ。だからちよつとビビらせてやろうと思って、回し蹴りをそいつの顔にぶちかましてやろうとしたんだけど、相手にかわされてそのままの勢いで自販機に……」

「だから？」

「そいつが悪い！」

「お前が百パー悪いわ！！」

どんな思考回路してやがんだ、こいつは。

ハムスターが頭ん中で車輪を回してんじゃねえの。

そう言いたくなるほど見事な責任転嫁だった。

「まあ、そんなことよりも、早く学食に行こうぜ！席なくなっちまう！」

「話を逸らすなっ！」

しかし、実際その通りだったのでそれ以上は突っ込まず、この騒ぎの中横で読書していた宇佐美を呼ぶ。

「宇佐美行くぞ」

宇佐美は本を閉じると黙って立ち上がり、机の横にある鞆から真っ黒な箱に入った自作の弁当を取り出した。

こいつは常日頃から弁当は自作である。だから僕たちが学食に行くときはその弁当を食堂に持っていく。

ちなみに僕は作らない。妹がまだ給食なので一人分だけ作るのは面倒だからだ（母親は鍋を爆発させるレベルの才能の無さなので作らせない）

「よし行くか」

教室の扉の方向に向かう。

その時。

僕の目に信じられない、いや、背筋が凍るようなものが映った。それは廊下の窓際を背にもたれかかり、暑さを感じさせない冷や

やかさな様子で誰かを待っているようだった。

三年生の印である赤いタイが、青いタイをつける一年しかないこの廊下ではかなり目立っていた。

僕が佇んでいると彼女は僕に気付き、笑顔を浮かべた。

もちろんそれは昨日と同様にいい印象とは到底呼べる代物ではなかった。

一年の教室に堂々と彼女は入ってくる。

美しく長い黒髪が風で靡く。

横では幸村が何か言っているようだが、今の僕の耳には届かなかった。

彼女は僕の眼前まで迫ると言った。

「屋上までご足労願えるかしら。久重君」
間違いない。

こいつは東金凜々子だ。

「初めに」

東金は屋上へ向かう階段の踊り場で僕に話しかけた。

どうやら屋上というのは言葉の綾で、僕を連れてきたかったのはここらしい。

幸村と宇佐美には先に食堂のほうへ行ってもらった。

幸村が『どういう関係だ』的なことを言っていたが、知られると面倒なので、適当にごまかしておいた。

というわけで、噂の東金凜々子さんと二人きりである。

「何かあなたから言いたいことは無いかしら」

東金は階段を一段登り、まるで僕を見下すかのように、ていうか、実際見下して言った。

背高いな、こいつ。

「僕はストーカーでもないし、殺人犯でもありません」

「それは今から私が決めることね」

……………。

じゃあ聞くなよと言いたい。

「他には」

東金は短く発する。

「………何で僕のクラスがわかったんですか。いや、それ以前に何でこの高校だって………」

僕はあの時私服だったのだ。

お世辞にもファッションセンスがいいとは言えない服装だったが、制服ではなかったのだ。

「それについてはこれね」

東金はそう言うと言っていた紙袋から見覚えのあるビニル袋を僕に差し出してきた。

「このスーパーの店員に聞いたのよ。『赤縁メガネの男の子がさつき買物していかなかったか』って。それはそれは簡単に教えてくれたわ。個人情報駄々漏れね。常連さんなんだって？久重君」

長い髪を揺らして、嘲笑する。

「………それでもまだせいぜい半分ってところでしょ。学年とクラスについてはどうしたんですか」

「あなた、バカなのね」

質問してから0.7秒ほどで返答が返ってきた。

「そんなの名前さえわかってしまえば簡単に割り出せることでしょう？今はネットもあるんだし。いちいちそんなことで私の口から声を発させないでくれるかしら」

「……………」

こいつ何様のつもりなんだ。

あのバカよりも全然腹が立つぞ。

「質問」

東金は短く僕に聞いた。

「………無いです」

だから、僕もそれしか答えなかった。

「そう」東金はあまり興味が無いのか、ため息混じりだった。

「じゃあ私の質問と参りましょうか、久重君」

階段を一段降り僕と同じ目線に立つ。

こっしらたらくわかるけど、こいつ背が高いというよりもめちゃくちや足が長いな。

「なぜ、私を付けて来たの」

東金は僕から目を逸らさず聞いた。

「……昨日殺人事件があったから、あの土手に向かう女子を見て危ないと思ったんです」

「それは、危ないなと思って注意を促そうとしたの？それとも、危ないなと思ってそのか弱い女の子が赤帽子に殺されるのを見たかったの？」

「んな訳ないでしょう？もちろん前者です」

ていうか、か弱い女の子はサバイバルナイフなんて振り回さないと思う。

「ふうん。そう」

東金は半信半疑といった様子だった。

「でも、あなたはあのスーパーから昨日の橋までかなり距離があったのに話しかけなかった。それはどうして」

「それは……」

言えない。

思いつかなかったなんて恥ずかしくて言えない。

僕は東金から目を逸らした。

「危ないと思うんだったら話しかけてくれてもおかしくないわよね。ねえどうして。答えられないの」

尋問のような容赦ない言葉攻めが続く。

「もっともしかしたら家がすぐそこなのかなって思ったんですよ！
その場合、話しかけるだけ無駄ってもんでしょう」

よおし、ナイス自分。これでごまかせたはずだ。

僕は東金の様子を再度見る。

「ふううつん」

明らかに疑われていた。

「まあいいわ」東金は記憶を探るように次の質問を並べた。

「私がナイフであなたを切りつけたとき、なぜあなたは私を倒した際にナイフを奪わなかったの。そして私から逃げた後、なぜ警察に通報しなかったの。突然ナイフで切りつけられたなら通報してもおかしくないでしょう」

東金は僕に尋ねた。

僕は正直に答える。

「ナイフを奪わなかったのはそこまで頭が回らなかったからです。早くこの場から逃げなくちゃと思っていましたから。それと警察に通報しなかったのは、なぜあなたが僕に切りつけてきたか理由がはつきりしていたからです。あれは明らかな勘違い起こったことです。から話せば解決できると思ったんです。ていうか、僕には今日まであなたが東金凜々子さんと言う確証は無かったんですから……」

「ふんふん、なるほど」

東金は今までの質問を見て、まるで僕自身を評価しているようだった。

「いいわ。わかった。あなたはストーカーの可能性はあっても赤帽子の可能性はゼロだわ」

「ストーカーの可能性もゼロです」

踊り場の窓から外の世界を眺めながら東金は僕に無罪判決を言い渡した。

その横顔は妙に残念そうであつた。

「もう行っていいわよ。お友達が待っているでしょう」

「ああ、すいません。その前に僕からもう一つだけ質問していいですか」

僕の言葉に振り向いた東金は明らかに意外そうな顔を浮かべていた。おそらく僕から質問が来るとは思っていなかったのだらう。

「何であんなところにあなたはいたんですか。もしかしてその赤帽子を探しているんですか」

「それでは質問が二つになっているわね」

東金は呆れる。

「あつすいません」

「——まあいいわ。答えは一つだから」

東金はまた外の世界を眺めると今度は目を合わさずに話した。

「この前の殺人事件の被害者、私の友人だったのよ」

「……………！」

担任は確かに十九歳くらいの女性と言っていた。

「家が近所だね。小さいころからずっと一緒に遊んでいたわ。でも最近はずっと会えなくて、久しぶりの再会がこれよ」

東金は遠くを見るようなまなざしで風を感じていた。

そのたびに揺れる長い黒髪はなぜだかとても儚かった。

「だから私がエサになって犯人をおびき出して殺してやろうと思ったのよ。同じ様に喉を引き裂いてやってね」

「……あまり賛同できた作戦じゃあないですね」

「あなたの意見なんてどうでもいいわ。むしろ不愉快よ」
「どうやら僕に発言権はないらしい。」

受信しかできないようだった。

「ふう、それにしてもやっと赤帽子が釣れたと思ったのにまさか勘違いだとはね」

外の景色を見るのをやめ、東金は大きく伸びをした。

「ていうか、普通、推理小説とかだと先に現場の状況や死体を調べたりして犯人を捜すもんですけどね」

それは単なる世間話のつもりで。

僕はきつとまた無視されるものだと思っていた。

そしたら、僕は食堂に向かう予定だったのだ。

しかし、それを聞いた東金の動きが止まった。

「……なるほど、盲点だったわ。プロファイリングね」

独り言のように呟くと僕の方に向き直った。

「明日、現場検証に行ってみましょう。明日は土曜日だから暇でしょう。朝十時にあの橋へ集合」

「……はい？」

何のことだ。ていうか、それよりも。

「僕も行くんですか……？何で？」

そう尋ねると、東金は不思議そうな顔で答えた。

「あなたは助手よ。私に使ってもらえるんだから光栄に思いなさい。レッドアイズ」

「僕は助手でも真紅眼の黒龍でもないっ！！」

しかし僕がそう訴えたときには目の前に東金はいなくなっていた。やはりあいつには瞬間移動能力があるのではないかと僕は思う。

「……そういえば」

僕はそこにあった空のスーパーのビニル袋を見て思い出す。

「昨日の食材返しやがれっ！！」

五階の屋上から二階の三年生の教室まで届くほどの大きな声で。

僕は叫んだ。

東金凛々子06（後書き）

東金凛々子一章終了です。

ダークサイド01（前書き）

二章です。

一章？↓<http://ncode.syosetu.com/n9717k/1/>

ダークサイド01

七月七日。まるで夏の花火の中にいるみたいな、そんな暑い日。私は落ち込んでいた。

「はあ……、私、久重君に迷惑かけちゃった……」

今日、私は宇佐美君の友達だと言う久重君と知り合った。

実は何度か顔は見たことがあったのだけれど、あまり印象に残るタイプの男の子ではなかった。どちらかと言えば——言わなくても地味だし、特徴と言えばあの赤縁メガネくらいしか思いつかないような子だった。

その久重君に質問をされた。

そして私は答えることができなかった。

屈辱、だわ。

こんな不快な気分にはまったく思っていなかったわよ！完ッ全ッに想定外ッ！今朝の時点では私は今日もパーフェクトなまるで天使のような女の子で、みんなから愛される美少女の予定だったのよ！なのに！まさに終了間際！放課後の下駄箱という状況であの赤縁メガネが東金凜々子なんて守備範囲外の奴の事を聞いてくるからアアア！

……私は答えられなかった。それは赤縁……久重君に迷惑をかけたしまったというわけで、そしてそれは自分が完璧ではないと言うこと。

返答を求めている相手にはその相手の欲している回答をしなければならぬ。

それが完璧と言うもの。

私は完璧じゃない。

……いいわ。

調べてやろうじゃない。

この清風しほりの名にかけて、東金凜々子を骨の髄まで調べてや

るわよ。

私はその時駅のベンチに座っていた。

それほど大きいというわけではないその駅には、会社帰りのサラリーマン、放課後を満喫している女子高生。彼らを相手にティッシュ配りをしているアルバイトやらで溢れ返っていた。夕焼けに照らされた人々が影のコントラストを作り、一日の終わりを感じさせる。広場の中心にあり、ベンチの後ろにある大きな大木は青々とその葉を茂らせ、駅のシンボルとしてその場に聳え立っていた。

私がそこで所在なさげにしていると、鞆からバイブレーションの音が聞こえてきた。

携帯を取り出す。

ディスプレイには『受信メール一件』の文字があった。

決定キーを押してその内容を確認する。

それは東金凜々子と同じ中学だった友達から来たものだ。

東金先輩はとにかく頭がいいみたいでよく全校集会でなにかしら表彰されてたよ。そういう表彰ってスポーツでいい成績を残した人がもらうことが多かったからその中で明らかに浮いてた。そもそもあの人、暗そうな人だったし誰かと話しているところなんて見たことないしなあ。だから私も良くわからないんだけど、なんか噂ならいろいろあったよ。

たとえば、友達をイジメグループの主犯格を振り返ちにして土下座させたとか。まあ、あくまで噂だけだね。

私が送ったメールに対しての返事だ。

しかしそれは、すでに私が知っているような情報ばかりであった。東金が誰かと話しているところを見たことがないと言っている以上、友達は何なくきつと誰に聞いても同じような内容が帰ってくるのだろう。

「いきなり行き詰まっちゃたなあ……」

私は情報通ではあるが、それはあくまでも出所はたくさんの方達から来るものだ。だからその友達がわからないとなるとあまり打つ手を持っていない。

先ほどの夕焼けはすっかり姿を消してしまい、まるで今の私を表すように日は沈んでいた。

「……明日直接乗り込もうかしらね」

東金凜々子と直接会話をすれば何かしら情報が集まるのではないだろうか。私はそう考えていた。

しかし、危ない奴だとも言われていた。

確かに私は誰にでも優しく接することができる。

完璧に。

だが、その私の自信を壊させるほどの何かを私はその東金凜々子から感じ取っていた。友達が少なく、頭が良くて、イジメグループのリーダーを土下座させる。そんな女。

あまり関わりたくない人間ではある、私なら特に。

私は悩む。

悩んで。

拳句に今日はもう帰ろうとベンチから立ち上がった私の目の前をそれは通った。

風に靡く黒い長い髪。

その髪の美しさを強調させるところまでも白い肌。

鋭い凜とした瞳。

すらりとしたまるでモデルのように背の高いその女。

駅の前、人がたくさん行きかう中、その姿はどこか浮世離れしていた。

ああ、私はこの女を見たことがある。

東金凜々子だ。

彼女はまるで私に気付かず、私がさつき歩いてきた方向とは逆方向に歩いていった。

そして彼女と私はすれ違う。

——チャンスだ。

今ここで彼女に話しかけることができれば、いろいろな情報が掴めてあの赤縁メガネ君の私に対する評価を取り戻すことができるかも！

私は振り向いた。

が、そこに東金凜々子の姿は無い。

見失ったあ！？

あちこちを眺め回しながら広場から歩道に出る。

下校するときは通るのを禁じられている裏路地。私はその曲がり角を折れる美しい黒い髪の後姿を見つけた。

しかし私は、気付いた。

それは学校に向かう方向でもあったが、同時にあの殺人事件が起きた橋の方向でもあった。

あの深くよどんだ黒い瞳を思い出す。

まさか……ね。

気に留めない振りをして、私は駆け出した。

話しけることはきつと簡単だった。

そこに知り合いがいなければ……だ。

東金凜々子はいらっしゃると思っただけ、また現れたと思うとまた姿をくらます。

まるでイタチごっこのように私は追いかけてくをしていた。

息も切れ切れになってきた私は駅の近くにあるスーパーの裏路地を通る東金を見つけ。

「なん……なのよ、あの人……」

何でこんな良い運動を高校生になってまでしなくちゃいけないのよ！

ていうか、何であの人息一つ切れてないの。いや、それ以前に走る姿すら見ていないのよ！

疲労しきつた体を引きずるように動かし東金を追いかける。

しかしそこでおそらく今の私にとって一番会いたくないであろう人物が目映った。

「なんつで久重君がいるのよっ！」

私と東金凜々子のちょうど中間にいるあの赤縁メガネは紛れもなく、昼のメロンパン男の者と同じであった。大きなスーパールのビニル袋をもった久重君はこそそとあたりを見渡しながら一定の距離を保ち、まるで東金凜々子をつけているように見えた。

「……ストーカー？」

そうか、そういうことか。だからこの私に聞いてきたのね。この天使のように純朴な少女である私に。

それなら一石二鳥だ。

東金凜々子の情報を手に入れつつ、この久重辰巳のストーカー疑惑もゲットだわ！

私は追いかける。

東金凜々子をつける久重辰巳を。

私の腕に巻かれた赤の蛍光色の腕時計が示す時刻は、すでに七時を回っていた。

ダークサイド02(前書き)

一章? ↓ <http://ncode.syosetu.com/n9717k/7/>

二章? ↓ <http://ncode.syosetu.com/n9717k/7/>

ダークサイド02

土手にこればいくらか涼しいかと思ったが大して変わらないようだった。虫眼鏡で一点に太陽光を集めたような昼間の日差しは、どうやら静寂に満ちている宵にも熱を残していったようだ。制服のブラウスが汗でビッシヨリ濡れている。タオルで体をこまめに拭いてはいたものの、やはり限度があるようだった。

こんな美少女のブラが透けていたら、男たちは日本にこのような暑さをくれた神様に感謝の意を思い出すことであろうね。

私は東金凜々子を、もとい久重辰巳を尾行している。

殺人事件があつた橋へと繋がっている土手。その遊歩道を三人はそれぞれ十メートルの間隔を空けて歩いていった。しかし歩くこと十分以上、何も動きは無い。

「……つまらないわね」

私は呟いた。前にいる久重君に聞こえないくらいに。

時折、久重君は周囲を警戒する動きを見せた。

そのたびに私は横の土手にある草むらの中に身を潜めた。外灯一つ無いこの道では、そこにいる限り尾行をバレることはまず無いだろう。

——そうか。ストーキングを誰かに見られることを恐れているんだな。私的には盗撮でも始めてくれるといかにもストーカーらしくて面白いんだけどなあ。

まるでスクープを狙う記者になったようで、つい一人でにやけてしまった。

その後何分かそのまま道を進めた。

「――」

ふと空を見上げた久重君が何かを呟いた。

なんと言ったのだろうか。ここからでは聞き取れない。

久重君は顔を手で覆いまるで悔しがるようなポーズをとると東金

凜々子がいる前方を見た。

私も顔を横に出し久重君の背中越しにそちらを見る。

そこに東金凜々子の姿は無かった。

「また!?」

久重君と被ってしまった。今度は間違いなく聞こえた。

草むらの影に急ぎ、久重君を確認する。

しかし久重君はどうやら気付いていないようで土手を降りていく。その先にある橋——殺人現場とは違う橋だ。その下にはもうすっかり見慣れた美しい黒髪が見えた。

私は立ち上がりまた尾行を開始した。

一応不審に思われたかもしれないので、さっきよりも久重君との間をとる。大体二十メートルくらい。

土手の下まで降りるとすでに久重君は橋の下にいて、暗闇の中、姿は確認できなくなっていた。どうやら東金凜々子はその先にいるようだ。周りに人はいない。川のせせらぎが夜の静けさを伝えるように流れていた。

私とその暗黒の橋に向かって歩くたびにジャリッと小石が混ざる音が聞こえる。

ジャリ。ジャリ。

一歩ずつ踏みしめる。

いまさらながら、尾行って緊張するなあ……。対象が見えなくなると余計神経使うわ……。

私の頬を汗が伝い、それはやがて顎に溜まり、小石の上に落ちた。

ドスンッ!

汗が地に落ちたと同時に聞こえた重い音。

その時すでに私は橋の下にいた。

「ウワアアアアアアアッ!」

瞬間。

無音だった世界に痛烈に響く叫び声。

それは私の斜め前。橋の下の暗闇を抜け、橋の足である大きな石柱を曲がった先からだった。

突然そこから出てきたのは久重君だった。私は跳ね飛ばされた。

しかし、久重君は当たったことにも気付いていないようで、まさに逃走といった様子で一目散に走り去っていった。私は背中を石柱に激しく打つ。息が一瞬止まった。

逃走。

彼は何かから逃げたようだった。

いや、何かって、あんたわかつてるでしょ。

光の速さで思考が頭を駆け巡り自問自答を繰り返す。

右側に視線を移すと、主婦が今から料理を作るんじゃないかと思うような食材とさっきまで久重君が持っていた空のビニル袋が破れて落ちていた。月明かりに照らされていたそれらから突然光がさえぎられ影ができる。

ジャリ、と小石の音が聞こえた。

私はその方向に顔を上げた。

「ねえ、彼が赤帽子じゃなくてただのストーカーなら、赤帽子はあなたなのかしら？清風さん」

見覚えのある黒髪が視界を覆った。

そして、その右手には見覚えの無い鋭利なナイフが握られていた。

ダークサイド02（後書き）

字数が少ないです……。

ダークサイド03(前書き)

一章? ↓ <http://ncode.syosetu.com/n9717k/7/>

二章? ↓ <http://ncode.syosetu.com/n9717k/7/>

ダークサイド03

——息ができない。

背中を強くぶつけたせいではない。私の頭の中を支配する圧倒的恐怖感のせいだった。

額から汗が噴出してくる。

東金凜々子はそのどこまでも深い暗黒にかたどられた眼球で私を見下した。

「答えてよ、ねえ、清風さん……。あなたが赤帽子なの？」

彼女の右手で光るナイフが私に警告を告げる。

マズイ。

殺される、このままでは。

この女が声を発するだけで、私の首は硬い縄でどんどん絞められていくようだった。

例の殺人事件のように。

「……………ふう」

東金凜々子が溜息をつく。

「どうやら違うようね」

彼女はそう言うのと右手のナイフを手馴れたように手で回し、華麗にカバーへと入れた。

私はそれによってやっと呼吸を許された。

「私に睨まれて声も出ないような女の子があんなグロイ殺し方できるわけ無いもの。ていうかそもそも私の予想では犯人は男なのよね……………」

……………やっぱりさっきのストーカーがクロかしら……………」

東金凜々子はまるで私がいないように独りでぶつぶつ唱えている。私は逃げ出したかった。

私のことを突き飛ばして行ったあの赤縁メガネのように、力の限りを出し切って暗黒に囲まれたこの場から立ち去りたかった。

彼は本当にストーカーなのだろうか。

「ねえ、清風さん」

突然、話しかけられる。

「はいっ！」

やっと声が出せた。

だからと言ってこの場がどう変わるといっわけではないのだけだ。

「私、あの子が私をストーキングしていることは知っていたの。そしてその後ろに彼をストーキングしているあなたにも気付いていたの」

「——っ」

せつかく出せるようになった声を私は口から出すことを許さなかった。

「泳がせていたのよ——彼のこともあなたのことも」

彼女は時折、手品師が種明かしをするときのような笑みを見せながら、私のことを馬鹿にするように話した。

「まあ私としてはどっちが犯人かはわからなかったから、最初のほうはわざと逃がして隠れているもう一人からじっくり話を聞こうかと思っただけだけど……ねえ、清風さん」

もう何度目であろうか。彼女は私に問いかける。

話を聞く限りどうやら彼女は、今日HRで話された殺人事件の犯人を捜しているようだった。

「あの男の子、あなたはあの殺人事件の犯人だと思う？」

「えっ？久重君が？」

しまった。

封じていた口からつい彼の名前を発してしまった。

「ふーん。久重君ね」

彼女は不適に笑う。不気味なあの目が弧を描いていた。

「なんでそんなことをしていたのかは興味無いけど、ストーキングしているのだから当然知り合い——もしくは関係者よね？同じ学校かしら。ねえ、清風さん。ストーキングしていたことは黙っていて

あげるから彼のこと教えてくれないかしら」

また彼女に問いかけられた。

「どうやらこの人の口癖は『ねえ、。。。』のようだ。

「……言いません。尾行していた理由も言いません。それは私のプライバシーです」

私はその問いかけに強気に答えた。

汗に染みた制服がより重くなった気がした。

「ハハハッ！プライバシー？」

彼女は嘲笑した。

「彼のそれを犯しているのがまさにあなたでしょう！……まあいいわ。名前さえわかればこっちのものだから。それじゃ」

そう言うとな彼女は落ちていた破れたスーパールのビニル袋を拾い上げ、私のことは興味なさげに背を向け立ち去ろうとした。

その時。

「ああ、そうそう」

彼女は思い出したように私に言った。

「もう夜は制服でここを通らないほうが良いわよ」

「……どうしてですか」

私は喉を振り絞って彼女に尋ねた。

すると東金凜々子はさっきまで浮かべていた気持ちが良くない笑顔を消した。

「……赤帽子に狙われることになるから」

彼女のその言葉はまるで迷いが無く、確信的な自信に満ちたものだった。

誰もいなくなった土手。

そこに私は座っていた。

上を見上げると空には星が浮かんでいて今日は七夕であったことを思い出す。

月明かりに照らされた服は汗で透けに透けて、きつとブラのホックが丸見えになっていることだろう。夜になっても夏の暑さは容赦なく続き、風を生温いものにしていた。

「いいわよ……」

私は川のせせらぎが聞こえる静寂の中、呟いた。

「ようはあの女よりも早く犯人を捕まえればいいんでしょう……」
身体が怒りで震えるのがわかる。

——東金凜々子。

何様のつもりかしら。

私は夜空の星に吼えた。

「そうしたらあのム力つく陰湿女に勝った事になるんでしょうっ！」
私は駅に向かって駆け出した。

たぶん電車の中での男の視線も気にならないだろう。

現場検証01

七月九日。まるで火あぶりにかけられていたようなおとといの暑さが嘘のように、その日の空はどす黒い雲が世界を構築していた。休日と言うこともあつてこの町の小さな商店街も賑わいを見せており、見知らない主婦たちが久々の涼しい夏の日を世間話の合間で喜んでいた。

僕はそんな日常の風景を横目でほほえましく眺めながら、あの殺人事件があつた橋へと足を進めていた。

現在の時刻は九時三十分。

「遅い」

例の橋の少し手前。

閑静な住宅街の中の一隅にいた東金凜々子は第一声で僕にそう吐き捨てた。

「いついやいや、全然遅れてないですよっ！ホラ、まだ四十分です」僕は私服姿の東金に携帯のディスプレイを見せ付ける。時計は持たない主義だ。

「何言つてんの？あれはあくまでも目安でしょう。助手が私より遅く来たら、それは遅刻と同意義よ」

「謝りなさい」

……………。

あー、なんだろう。

こいつは人をムカつかせる才でも持っているのかな。

第一声からそんなこと言われるとさすがに僕でもテンションが下がる。

ていうかむしろ、あんな一方的に結ばされた約束をちゃんと守っている僕に対してお礼があっても良いくらいだ。よし、ここはガツンと……………。

「ごめんなさい」

自分のちつぽけさに嫌になる……。

世にも珍しい才能の持ち主である東金は大きく溜息をつく、いかにも不機嫌そうな目で僕を睨んだ。

「……で？」

そして、僕に向けられていた視線は真横の二人に向けられた。

「これらは何？」

視線の先、宇佐美はいつも通り落ち着いた様子で東金を眺め、そして幸村もまたいつも通り話題の美女（性格は僕の人生の中で最悪だが）を前にして、慌てふためいていた。

東金にとつてはこいつらはこれら扱いらしい。

「いや、捜査するなら人は多いほうが良いかなと思って」

「……あなた、情けなくないの？ 助手の癖に遅刻して、おまけに人の力がないと満足に働くこともできないのね。ふう……これならアリに頼んだほうがマシかしら」

お前と二人きりで居るのが恐いんだよっ！

「そうなんですよ〜！」

東金の暴言によって少なからず凹んでいる僕を尻目に、待つてましたといわんばかりに幸村は会話を投げかけた。

「いや〜こいつは本当にオレ達がいらないと何もできない奴なんですよ。まあイケテルオレに頼っちゃうのも無理は無いんですけどね！ あ、オレ幸村人一つて言いま〜す！ なんなら助手は俺がやりましようか！」

「へえ、久重君はストーカーだけでなくホモでもあったのね」

「黙れ！ 幸村ア！ お前のせいでいらん誤解が生まれているっ！」

「誤解？ 久重君はホモサピエンスではないの？ ……やはり、新種の……」

「お前も黙れエ！」

数が多いほうが東金の暴言を緩和できると思ったのにこれはもしかして二倍疲れるだけなんじゃなからうか。

僕の休日の雲行きは怪しい。

「まあいいわ。問題があるの」

私服姿の東金は新鮮であった。

というか、東金とはまだ二回しか顔を合わせていないし親しい間柄と言うわけではないのだが、東金の私服は美しかった。全身黒色でコーディネートされており、それは細い体をより強調させていた。東金はさっきの僕への暴言の数々を忘れたかのように切り出した。「当たり前と言えば当たり前なのだけれど、橋ではまだ警察が張っているのよ。あれをどうにかしない限り間近で検証することは不可能と言うものよね」

前方に見える橋の両端には若い警察官が暇そうに立っていた。

「……何でそんなこと昨日のうちに気付かないんですか!」

僕は怒りに身を任せ叫んだ。

「あなただって昨日は気づいていなかったじゃない。まったく人のことばかり非難するのは愚の骨頂よ。時代の天才たちはその醜い嫉妬のおかげで日の目を見る前に——ああそうか私は天才だからこういう扱いされてしまっても仕方がないのね。ふう……賢いって辛いことだわ。でも私、そんな久重君でもちゃんと話し相手になってあげ——」

「お前は無口キャラだったろうっ!」

東金凜々子。

友達と話しているところなんて見ることもできない深窓の令嬢である。

急に饒舌になった東金はそんな僕の言葉も無視して自分の話を続けた。

長い無駄話は語ることもないのでカットする。

「——というわけなのよ。あなたの小さな小さな脳みそでも理解できたかしら久重君。ところで話は戻るけれど、橋には警察が居るの。」

だから誰か一人があいつらをひきつけ、その間に検証するのはどうかしら」

「そうですね……」

現場検証を始める前から僕のスタミナは切れてしまいそうだった。パワプロのピッチャーだったら全ての球がど真ん中に行ってしまうだろう。

ちなみに宇佐美は読書中。

「じゃあ、あなたたちがじゃんけんして、負けた久重君がおとりになるということだ」

「そのネタはもう使われているぞっ！」

読書していた宇佐美と仲間外れにされて端っこに涙目で座っていた幸村を呼んでおとりを決める。

もちろん、誰が負けたかは言うまでもない。

「頑張れよ……バカ！」

「オレかよっ！」

そう言つと幸村はじゃんけんに負けた左手をじっと見つめ、目を瞑るとやがて覚悟を決めたように警官の元へ歩いていった。

颯爽と歩く後姿。

警官は橋に近づいてくる彼に気付く。

君、ここは通行禁止だよ。

彼は答える。

「誰も俺は止められないのさ！」

突然走り出した彼を警官は取り押さえた。

さあ、来い。

そつえば君、おとといもここで捕まっただな！

いい加減警察をおちよくるのはやめたまえ。

遠くから彼を連れて行く警官たちの声が閑静な住宅街にこだまする。

「……………作戦成功」

草むらに隠れていた東金はにやついた顔を隠そうとはしなかった。神秘的とも言えるあのオーラは今の彼女からはまったく感じられなかった。

現場検証01（後書き）

もう何書いてんだかわかんね

吉江軍治 01

七月六日。久しぶりに雨が降った暑い日だった。

その日、俺は夜の街を徘徊していた。

「軍治さん」

自販機の前で座っていた俺に睦月は缶のビールを差し出した。

「ああ、悪いな」

フタを開けると小気味のいい音がし、すぐにアルコールの臭いが漂った。

「いえいえ、この高橋睦月！軍治さんには永遠の忠誠を誓いましたから」睦月は照れ臭そうに顔を崩して言った。

「ご用なときはいつでもお呼び下さい」

「そうさせてもらうよ」

昔の俺にあこがれて染めた金色の髪が睦月の微笑みと共に揺れた。俺はビールを喉に流し込んだ。

「しかし、どこにいるんでしょうねその女」

睦月は俺の隣に腰掛けぼやく。

「さあな、わからないから捜しているんだ」

俺は缶を再び口に運ぶ。

「まったく人騒がせな女ツスよね。面倒掛けさせないで欲しいツス」
「……そういえば健次郎はどうした？」

俺は話を遮って言った。

「ケンはまだバイトツス。どうしてもシフトを外せなかったらしいツス」

「そうか。いきなりの徴集だったしな。仕方ないか」

「んなもんサボればいいんすよ。まったく、久しぶりの軍治さんの徴集に遅れるだなんて」

革ジャンの裏ポケットから俺はタバコを取り出し、火をつける。

「いや、お前らは自分たちの生活を優先してくれ。俺はもう『將軍』

じゃねえ。お前らをこうして集めるのも本来したくはないんだ」

「軍治さん！」

睦月は声を張り上げた。

「さつきも言っただでしょ。ご用なときはいつでも呼んでください。軍治さんが遠慮なんて似合わないッスよ」

そう言っただけに笑いかける。

「そつだな」

タバコの煙はたくさん星が望める夜空へと昇っていった。

——どこ行っちゃったんだ。

——千里。

今井千里はどこにでもいるような平凡な女子高生だった。

それはそれは真面目な性格で、親からは自慢の娘だったらしい。小、中とそこそこの成績を残し、高校受験ではいわゆる難関校と言われる高校に進学することができた。

しかし無理して入ったためか、そこでの成績は下の中といったところでそれは一年経っても変わらなかった。

最初は他の生徒に遅れをとらないように必死に勉強していたが、それも長続きはしなかった。

やがて、勉強から逃げるように千里は夜遅くまで町をぶらつくようになった。

思春期にはよくあるグレるというやつだ。

一方そのころ俺は、この町の夜の『王』だった。

オールバックに黒バイクといった風貌で、『金色の將軍、吉江軍治』といえば相手は尻尾を巻いて逃げ出すほど、俺はこの夜の町で権力を支配していた。

ここは小さな町だ。噂が噂を呼び、グループの手下以外は俺を恐れ、近づくことはなかった。

——毎日、敵勢力との真夜中の抗争に明け暮れていた。

俺は無敵だった。

ある日のことだった。

空に星が満ちたころ。天下の大通り（勝手に自分が名づけた。俺の道らしい）を歩いていると女が一人でふらつきながら近づいてきた。

町の人間は誰も関わろうとはしない。

俺はそいつにまったく興味を持たなかったが、俺に似ていない弟が毎日一日一膳を心がけていることを急に思い出した。

つまり気まぐれだ。俺はそいつに声をかけたくなった。

「おい」

その女は顔を上げると、力なく笑った。

「……お前、ラリってんのか」

その少女は目の焦点が定まっていないうだった。

近頃、麻薬の密売がこの平和な小さい町でも行われていると聞いた。俺の庭で勝手なことやらかしてくれている連中を潰すことが俺の最近の徘徊理由だ。

「たくつお前みたいなガキが——名前なんつーんだ？」

「なまえ？ちいさとお……」

「ちさと？千里だな？よし、千里。ちょっとついて来い」

意思疎通はできるようで千里は少し困惑しているようだった。

「良いもん見せてやるよ」

俺はこのとき千里と出会えて本当に良かったと思っている。

おかげで俺はまっとうな人生を送ることができるようになった。

まあ、それも夜限定の話なんだが。

吉江軍治01（後書き）

なーんもおもいつあかないや

現場検証02

尊い犠牲となった幸村を除いた僕たちは殺人現場である橋の裏側にいた。

そこは子供のころ、探検ごっこと称してよく遊んだ橋とは寸分変わらず、首吊り殺人があつたとは今でも信じることができない。そのころは僕も活発な少年で、川で遊んでいたら足を滑らせ溺れ一緒に遊んでいた裕香が助けを呼びに行ったことがあつたことが記憶に残っている。

裕香が助けを呼びすぎて、さらに噂が噂を呼んで、町中の人間が集まる大騒ぎになってしまったのは忘れたい記憶だ。

「確か、死体はこの辺に吊るされていたのよね」

東金はそう言つて、橋の裏側のちょうど中間、川の真上を指差した。

川のせせらぎはそこで殺人事件が起こったなど無縁のように静けさを演出していた。

川幅はたいしたことはない。目測で十メートルほどだ。

「そうらしいですね。で、その首吊り死体はなぜか喉元を裂かれていたので警察は殺人事件だと判断したらしいですね」

僕は最近の新聞の片隅に書かれていたこの殺人事件の記事、そこから得た情報を東金に話した。

つまり、誰かに殺されてから橋に吊るされたということだ。

「むごいな……」

宇佐美はいつの間にか本を鞆の中に入れ、橋に向かって手を合わせていた。

東金はいらだつように僕に言う。

「そんなことはもう知っているわ。そうじゃなくて私たちが欲しい情報は、現場にいなければ得られない情報でしょう」

「でも現場に来てわかることってなんですか？」

「本当にあなたはアホね。脳みそがスポンジになってんじゃないの？」

「僕は狂牛病感染者じゃねえ！ていうかそもそも牛じゃねえ！」

「そうね、牛に失礼だわ」

東金は僕に、もはや恒例となつた暴言を浴びせた。

そんなもの恒例にしたくはないのだが。

「なんでこの橋に縄をかけたんだろっな」

――。

僕と東金言い争っている中、宇佐美が呟く。

東金は宇佐美のほうに顔を向け、ふーんと、なにか含みのある笑みを浮かべる。

「なかなかどうして、あなたはあの赤縁メガネと違って賢そうじゃない」

宇佐美は何も答えはしなかった。

代わりに僕が答えた。

「どういう……ことですか？」

言葉に重みを持たせて。

僕は尋ねた。

すると東金は川のほうへ視線を移す。

「……あなた、自分が首吊り自殺するならこんな場所選ぶ？」

「……………あ」

そうか。

この事件の被害者――僕らと同年くらいの女性と聞いていたその彼女は、喉元を鋭利なもので切られていた。それから何者かに首を吊られ、一見、自殺のように見せかけられた。

「自殺つてもっと……こう、発見されやすいところっていつか。自分に縁のあるところで死にますよね」

「そう。電車の飛び込みとかビルや学校から飛び降りたりね。まあそうじゃない人もいるだろうけど、それにしたってあんなところには縄はかけないわよ」

もう一度、東金は橋の中間あたりを指差した。

川から橋の裏側までは四、五メートル。

他に場所があつたはずだ。

「なんで、犯人はあそこを選んだんでしょう。ていうか矛盾してませんか？」

僕は尋ねた。

「自殺に見せかけたかったなら、なんで刺殺なんかしたんでしょうか？」

東金は僕に向き直る。

黒い髪は彼女の華奢な身体に巻きつき、ただでさえ黒い姿をよりいっそう暗く見せた。

「そのほうが、きっと犯人に都合が良かったんでしょう」

東金は。

笑っていた。

僕たちはその後、現場の写真を撮り幸村を連れて行った警官が戻ってくる前にさっさとそこから立ち去った。

「現場検証ってあんなんですよかったですか？」

「いいのよ。めばしい証拠みたいなものはきつと警察が持っていてしまっているだろうし、とりあえず現場の写真を撮ることができれば十分だわ」

自販機で買ったミネラルウォーターを片手に東金は言った。

「それはそうと、宇佐美君だったけ？あなたこの赤縁メガネと違って頭良いのね」

宇佐美は壁に背を任せ、読書に勤しんでいた。

「別に俺は褒められるほどの知性は持ち合わせてはいないさ。それ

を言うなら俺よりもあんたのほうがう」

「あら、ありがと。否定はしないわ」

心の中で否定しろよ！と僕は突っ込む。

「だって私が賢いのは周知の事実でしょう。まったくこんなことにもいちいち突っ込まないで欲しいわね」

「心の中で突っ込んだことに文句を言われる筋合いはねえ！ていうか何なのその読唇術！？」

大きく僕は溜息をつき、意気込んで話を切り出す。

「で、何かは収穫はあったんですか」

わざわざ休日に集まってこんなことしてるのだ。なにかしら結果が欲しい。

「うーん、現状ではなんとも言えないわね。まだ写真撮ってから確認してないわけだし。今からどこか座れる場所に移動してじっくり話し合いますよう」

「……………！」

僕はまだ解放されないのか……！

宇佐美は読書中。

駅前のハンバーガーショップ。

休日のこの時間帯、二階の四人掛けの椅子に座った僕らの周りはどここの席も埋まっていた。

窓の外では休みを利用して大きな都市に出かける若者で溢れていた。

「じゃあ始めましょうか」

東金は先ほど殺害現場を撮影したデジカメを机の上に置き、その画像を表示させた。

KEEP-OUTと書かれた黄色のテープで囲まれているその橋

は先ほど僕らが見たものとまったく同じものだ。

「当たり前でしょう。バカなの、あなた」

「だから心を読むな」

「この中で不自然なところはあるかしら？」

東金はケラケラと笑いながら画像を見ている僕の反応を待った。

殺人事件が起きたとは思えない閑静な川が映された画像。

——何も不思議には思えないよな……。

数分の沈黙。

「はあ」東金はわざとらしく大きな溜息をつく。

「何も思いつかないの、久重君？あなたはバカと言うよりも頭が悪いのね」

「そんな事言われても無理ツスよ！大体、この中に変なところがあるかどうかもわからないのに」

「あるわよ」

東金は言い切った。

この中に不自然なものがあると。

「じゃあ、宇佐美君に聞いてみましょうか」

横で読書していた宇佐美に話の矛先を向けられる。

宇佐美は本を読む手を止め、デジカメに表示される画像を見る。

「……………」

やがて、宇佐美は口を開いた。

「どうやって吊ったんだ。死体」

「正解」

東金は宇佐美に指を立てる。

「どういうことですか！？」

僕はうろたえていた。

東金はそんな僕に見かねて答える。

「だ〜か〜ら〜、この橋は高すぎて人には届かないのよ。不自然でしょ、橋の端じゃなく真ん中だなんて。あら、今、私うまいこと言っちゃった」

「えっ？別に橋の高さは真ん中だろうが端だろうが変わらないでしよう？」

「違う。注目すべきなのは下だ」宇佐美は僕に言う。

「人間は地面があれば、そこに何かを踏み台にして縄をくくることができるんだ。だが橋の中心——その真下は川だろう。吊るのだとしたら……」

宇佐美は東金を凝視する。

「そうね」東金は宇佐美の無言の問いかけに答える。

「吊るのだとしたら——空でも飛べないとね」

東金は微笑した。

宇佐美は望んでいた答えが返ってこなかったことに落胆した様子で、つまらなそうに視線を窓の外に移してしまった。

その時、宇佐美が呟いた。

「清風？」

僕はその名前を聞き、窓の外に展開する町を見る。

その街道に彼女は居た。

清風しほり。

愛しのマイ・エンジェル。

彼女がそこに居るだけで周りの空間は癒される。もはや国宝レベルの美少女。

そんな彼女が。

男と歩いていた。

しかも。

「超かつこいい……」

そう漏らさずには居られないほどの遠目からでも分かる美青年だった。

よく見てみるとすれ違う人はあまりのお似合いっぷりに皆振り返っている。

.....。

あれ？

「あれって——」

「吉江晃ね」

東金もつまらなさそうに町を見下ろしていた。

「なんでバスケット部の天才シューターさんがこんなところに清風さんと歩いているのかしらね」

東金は僕に笑みを浮かべた。

その様子は人の不幸を喜ぶ悪魔のようだった。

ダークサイド04

七月八日。私は学校にいた。

大嫌いな蝉の鳴き声も今の私には、絶対的な何かに怯え『生きたい』と誰かの助けを願っている悲痛な叫び声に聞こえてしまう。そんな風に思えてしまうのは昨日の出来事が原因だろう。

東金凜々子。

私にとって彼女は、求められた情報の観察対象で、それを求めたある男子のストーキング対象で、私を完全に見下した唯一の女。許せなかった。

人生で私のことを下に見たのは記憶の限り一人もない。もちろん私より頭がいい人も運動ができる人もいたが、それは話が違う。彼らは決して私のことを蔑まなかった。なぜなら私はあくまでも彼らと友好的に接するようにしたからだ。

だが、彼女の場合は最初から私を格下だと認識していた。許せなかった。

何より、私が彼女に恐怖を感じていたことが許せなかった。だから私は決めたのだ。

あの女が探しているらしい通り魔、『赤帽子』をこっちが先に見つけて目の前で言っただけでやるんだ。

『赤帽子に襲われないで良かったですね』って。

いつも通り私は教室では優等生で通っていた。

友人の面白くも無い冗談に手を叩いて笑い、授業では先生に『前は本当に優秀だな』と言わしめたり、とにかくその時間が来るのを待った。

昼休み。

待ちに待ったその時がやって来た。

友人に委員会があるから先に食べてと相手が不快にならないように昼食の誘いを断り、向かった先は図書室だった。

うちの高校の図書室には生徒が自由に使えるパソコンが七、八台ある。

今それを使って調べるのはもちろん『赤帽子』についてだ。なぜわざわざ学校のパソコンを使うのかというと家にはそれが無いのだ（父が仕事で使うノートパソコンはあるが使用は禁じられている）図書室の扉を開けるとさすがに昼休みが始まった直後に訪れる生徒はいないらしく、それどころか受付にも人はおらず、その空間は静寂に包まれていた。エアコンが効いていて実に快適だ。

目当てのパソコンの前に座り、電源をつける。

ウンとパソコンが起動する機械音が鳴る。

さあ、丸裸にしてあげるわ……『赤帽子』

三十分後。

「だめだーっっ！」

キーボードの上に頭を伏せる私がそこにいた。

調べても調べても、出てくるのは私が知っているものばかりじゃない！インターネットを使えばもっとこそ情報が出ると思ったのに……！

気付くと周りは図書室にはすでに受験勉強をする三年生や昼休みを図書室で過ごす生徒で一杯になっていた。

「帰ろう……」

諦めて席を立とうとした時、

声が聞こえた。

「あの、何か困ってますー？」

「えっ」

隣にはいつの間にか男子が座っていた。

見るからに運動神経がよさそうなさわやかなその男子——緑のタイをしているということは二年生か。……ってあれ、ていうかこの人って。

「もしかして吉江……先輩ですか？」

「えっ？あっうん、そうだけど」

その男子は私の言葉に驚きながら答えた。

「やっぱり！私、先輩の試合見に行ったことあるんですよ！」

「ああ、それはそれはどーも」

よしえあきら
吉江晃。

進学校であるうちの学校で唯一力が入っている部活であるバスケットボール部。県内でもそこその成績は残していたのだが、この男が入ってから違った。

十年に一人の天才シューター。

クリエイター
芸術的放物線を描く創造者。

いろいろな通り名を持つこの男の異常的精度を誇るスリーポイントシュート、そのおかげでうちの学校はいきなり全国に名が知れる強豪校になった。

だからこの男の知名度は半端ではない。

この高校どころか近隣住民の方々は皆その名を知っているだろう。容姿も整っていてえらくもてる。隣のクラスの宇佐美君も女の子の間では人気があるけれど、はつきり言ってこの男に比べたら天地の差があると思う。

しかし、そんな天才かつ超有名人が昼休みになぜこんなところにいるのだろうか。

「ああ、俺さ。あの通り魔——今は殺人事件だよね、あれに興味があるんだ」

私の問いかけに吉江先輩はそう返答した。

「殺人事件に？」

驚いた。

まさか、私以外にもこんなことを調べている人がいるなんて。

ましてや、この天才、吉江晃である。

まあしかしこんな近所で起こった事件だ。そういう生徒もいるかもしれない。

初対面の人に『私も興味があるんです！』なんて張り切って答えるのもどうかと思ってとりあえずそのことは隠すことにした。

「ああ」吉江先輩は真面目な顔で言う。

「俺、結構オカルトとかホラーとか好きで、昔から事件の記事の切り抜きとかしてたんだよね。そしたらこんな近所で殺人事件だよ！調べないわけにはいかないじゃん！いや、こんなに興奮したの。去年の全国大会以来だよ！！」

しゃべり終えるころには子供のようにその事件に夢中になっている吉江先輩がいた。

「なんか意外……ですね。私の思ってた先輩とはイメージが違います」

「そう？俺いつもこんなんだぜ」

白い歯を見せ笑う吉江先輩。

「で、結局清風さんは一体何に困っていたのさ」

「あれ？私の名前知っているんですか」

私はさも不思議そうに尋ねた。

私を知らない男などこの高校にはいないのだが。

「んー、知ってるっていうか。まあ有名人だからねー君。俺はあんま興味ないけど」

「結構ヒドイことさらいと言いますねえ」

お互い冗談交じりで会話を交わし、私はようやく事件について話すことにした。

「実は私も興味があつたんですよ。その事件に」

「ええ！清風さんも！？」

相手は驚きを隠せない様子で私にその目を向けた。

「ええ、友達の友達がその殺されたって言う被害者らしくて、その子の悲しそうな顔見てたらなんだかいても経ってもいられなくなつて……」

もちろん、大嘘だ。

「ああーなるほどね」

しかし吉江先輩は疑うことなくそれを鵜呑みにした。

普通だったら、今の話では納得できないだろうが、私は清風しほりである。困っている人を助けずにはいられない天使なのだ。相手も『この子だったらやりかねない』という感じであろう。

「それで、パソコン使って調べただけで結局めばしい情報は見つからなかったってどこか」

「そうなんです……」

私は気を落とした振りをする。

吉江先輩はそんな私を見て笑って言った。

「じゃあ、今度一緒に調査でもしない？なんなら明日にでも。俺、結構な量の情報持つてるよ」

「えっでも、土曜日って部活は……」

「大丈夫、大丈夫。俺が一日いなくても文句は言われなくて」

エースがいなかったら大問題だろうという疑問は心の中にしまつて、私は相手からは見えない位置で拳を握り締めた。

ダークサイド05

七月九日。ここ最近の異常に照っていた太陽はまるで幻想だったかのようにその姿を雲に隠していた。町は休日ということもあり、雑踏していたと言えるほどの人で溢れていた。

駅の前の広場。そのシンボルである大きな大木の前のベンチに私は腰掛けていた。

只今、午前十時四十五分。待ち合わせ時間は十時ちょうど。その間にナンパされた回数——五回。

私のような目立つ人間がここにいることこそが悪いのだが、それにしてもうざつたい。

もうこの場から一刻も早く立ち去りたいところであった。

「ねえねえ、君一人？」

まただ。

チャラそうな男がお約束の台詞を並べて言い寄ってくる。

「今から友達とカラオケ行くんだけど、人数たなくてサア。良かったら一緒に行こうよ！カネはこっちもつし」

断ることはそれほど苦労しない、それよりも——。

「あの、私もこれから友達と遊ぶ約束してるんで。本当にごめんなさい！」

深々と頭を下げる。

男は鳩豆のような顔で一瞬哑然としてしまう。

「……ああついいいよ！こっちはこっちで何とかするからこっちこそごめんね！」

早口で別れを告げると男は駅に隣接しているドラッグストアの前で別の女を捕まえていた。

あらかじめ何人が狙いを付けておいたのだろう。

私は深く長い溜息をついた。

それよりも——完璧な自分を演じるのも疲れる。ナンパの断り方

も完璧でないといけないというのはさすがの私でもストレスが溜まる。

だから、休日はあまり外に出ないようにしているのに……………。

……あの男はなぜ来ない！？

吉江先輩が来ないことに対して次第に自分の中で苛立ちが募っていくのがわかる。

もうそろそろ待ち合わせから一時間が経つ。

もう本当に帰ってしまおうかと思ったが、しかし私にはするべきことがあった。

——東金凜々子。

あの女よりも——できれば警察よりも早く犯人を捕まえたい。

そしてあの女の高い鼻を折り曲げたい！

私の頭はそのことで一杯だった。

「あーもしもし？」

……だから、こんな男たちに対して私の貴重な脳みそを使わなくてはいけないことが煩わしかった。

「もう……いい加減にしろよ！クソ野郎どもがッ！！」

それは私にとって——物心ついてから『完璧』という仮面を被る様になった私にとって、およそ十年ぶりに発した本音の言葉であった。

「はあ！？えっ？ゴメンなさい？」

そこにいたのはおよそ一時間の遅刻をしてやって来た吉江晃、その人だった。

ウルトラミス。

『完璧』という壁が私の頭の中で崩れていく音が響く。

十年間積み上げてきた強硬な矜持の壁は内部爆発を起こし、いたるところに破片が飛び散る。

えまーじえんしー！えまーじえんしー！警報が発令しているよう

だ。

『何とかしろー！何でもいいからフォローを入れるんだー！』

清風王国（私の頭の中）のリーダーである髭の生えた私が必死に訴えている。

「あつつ……！あつえと……」

『やばい！予想以上にダメージは大きい！』

『とりあえず落ち着け！カルシウムだ！カルシウムを摂取しろ！』

私があまりのシヨックで言葉にならない声をあげている、その裏で頭の中では王国の住人であるたくさんの私が慌てふためいていた。

「清風さん？どつたの？顔色が悪いよ。真っ青」

混乱している私を見て、吉江先輩は心配そうに聞いてきた。

――！

「そう！ちよつと気分が悪くて、ついイライラしちゃって！本当にゴメンなさい！！ちよつと休みましょう！！」

言っや否や私は先輩の手を取り、無理やり引きずっていた。

駅前のハンバーガーショップを通り過ぎ、スクランブル式の横断歩道の一つ越えたところにあるファミレスに入る。

駅に向かう人たちと何度もぶつかりそうになったが今の私にはそんなことを気にする余裕は無かった。

カランと入店を告げるベルが鳴る。

「いらっしやいませ〜！何名様でしょうか？」

「二人！」

息切れ切れになっている私を見て店員は少し引いていたが、こちらのお席になります、と笑顔で応対した。

四人掛けの席に案内されそこに座る。

私はふう、と一息ついた。

「ぶ」

真正面に座った先輩がこらえ切れなかったようにふきだした。

「あはは！清風さん俺のこと『自分のイメージと違う』って言うってたけど、清風さんも全然俺の想像と違うよ」

……あれ？

フオロー失敗！？そんな、せつかくごまかせたと思ったのに！
えまーじえんしー！えまーじえんしー！再度、警報が発令している。

しかし、続けて先輩は言った。

「清風さんつてもつと箱入り娘みたいな感じかと思ってたんだけど、驚いたよ、突然訳もわからず俺の手どんどん引っ張って行くんだもん。あつそういうえば気分悪いんだっけ、大丈夫？」

先輩は私の言ったことなど気にも留めず、私の身を案じている。
……ということは私の本性はまだばれてはいないのでないだろうか？

そう思った瞬間。私の頭の中の警告音は壮大なファンファーレへと姿を変える。

頭の中の住人はちぎりを撒いて、お祭り騒ぎだ。

「はい、もう大丈夫です」

いつも笑顔を絶やさない私だが、このときばかりは心の底から生まれた笑顔だった。

適当にオーダーを済ませると、先輩は手を合わせ私に頭を下げた。
「いやー、それにしてもゴメンね、遅刻しちゃって。『今日こそ練習に出てもらうぞ！』って部活の連中に捕まっちゃってさあ」

「あ、いえ気にしないでください。そんなに待ってないので……」

ほんの一時間ですよ。

心の中で毒づく。

「でも、本当に大丈夫なんですか、部活行かなくても？試合近いんですよね？」

一応気になつてはいたのでそのことについて尋ねた。

しかもその人の言い方だと毎回サボっているようだった。

「うーん、いやもちろんまずいんだけどサア。次の大会って三年生にとって最後の試合なんだよね——ホラ、俺まだ二年じゃん。出れない三年もたくさんいるのにその人差し置いて俺がしゃばるっていうのがどうもね……」

先輩はうんざりしていた。

それはまるで周囲の期待に応えるために無理に頑張っているどこかの漫画の主人公のようだった。

「先輩は」

私は言葉を探るように紡ぎ出した。

「もしかしてバスケしたくないんですか？」

校内で知らない者はいない天才シューターに対して失礼なことを言っているなと感じていた。

しかし、先輩は答えた。

「……そうなのかもね。なんか自分がやれることの限界が見えてきちゃってるし」

衝撃発言だった。

「……ええええっ!？」

自分で聞いていおきながら私は大声を出して驚いた。

そんな記者会見物の爆弾発言をこんなところでしなくてももらいたい。

「そなたっ!先輩、頑張りましょうよ!せつかくの才能がもつたいないですよ!!」

ていうか私、責任取れません!

先輩は苦笑いを浮かべていた。

「おいおい、そんなことよりも今日は事件について調べるんじゃないかったの？」

「そんなことっ！？」

我が校の最高事項を何だと思っているのだろうか。

「ここ出たら俺の家に行こうか。事件について集めたデータがあるんだ」

「……………はい」

どうやら先輩は部活についての話はあまり語りたく無いようだった。

私はそれに応えるように短く返事をした。

先輩は窓のくぼみに肘をついて私に他愛も無い話をした。

その顔は先ほどよりも少し寂しそうだった。

吉江軍治 02

「どうだ、綺麗だろ」

俺は千里をバイクの後ろに乗せて車がもう通っていない大通りを抜けた。

そして川をまたぐ大きな橋を渡り、しばらくの間町を外れた山道の風を切る。

俺の後ろで背中にしがみついている彼女はとても弱弱しく、まるでこの風で吹き飛ばされそうであった。

山道を登りきった先には大型駐車場があり、心地よい夜風が吹いていた。

「わぁ……」

そこは町を一望することができた。

駅を中心に光が集中しており、それは外に外れていくたびにちらちらと分散していく。

まるで夜空の星が落ちてきたと錯覚させる。

千里は歓喜の声を上げた。

「弟は嫌なことがあるとここによく来てなあ——俺には弟が二人いるんだが、ここでよく愚痴を聞いてやったもんだ」

「……なんだか素敵ですね」

「何がだ？……ていうかお前、ラリってたんじゃないのか？」

どうやら酒に酔っていただけらしい。

まあ麻薬じゃなくて良かった。高校生に酒を薦めるつもりはないが、麻薬よりは全然マシだった。

「私、一人っ子だったから、そういう兄弟がいるのに憧れるんです」
そう言つて、千里は俺に笑いかけた。

先ほどまでのほろ酔い状態とは違って、真面目そうで知的な目をしている娘だった。

「……まあ、その兄弟ももういないんだけどな」

町を眺めながら呟いた。

その言葉に千里は目を丸くする。

「何かあつたんですか？」

「最近、あいつらの姿が見えなくてなあ、会話もしばらくしてねえ。」

……最後に会ったのいつだったけな」

俺はそれを思い出そうとする。

千里は申し訳なさそうな顔を浮かべ、呟いた。

「……ごめんなさい」

「おっ謝ることができるってことはもう酔いは覚めたみたいだな」

俺は気にしていないことを示すために、無邪気に笑いかけた。

「お前もなんか悩んだらここに来い。そんなときに俺が相談に乗ってやるよ」

俺は千里の髪を乱暴にくしゃくしゃと撫でた。

千里はケラケラと笑っていた。

「はい、そうすることにします——ええっと、名前は——」

「ああ、名前か。吉江軍治」

「軍治さんですね。なんか強そうな名前ですね！あつ私は今井千里って言います。千里って呼んでください」

千里は右手を前に差し出してきた。

「いい名前だな。よろしくな千里」

俺はその手を握った。

「はい、よろしくです」

現場検証03

その光景に少なからず僕はショックを受けていた。

いや、と言つてもだ。悔しくて枕を涙で濡らすとか決してそんなレベルではない。

だって、あの清風しほりだ。

学園のシスター。

愛しのマイ・エンジェル。

言つなればみんなの清風さんだ。

そんな彼女が男と歩いていたらそりゃ誰だって寂しい気持ちにならないわけが無いさ。

……寂しくないわけ………ないじゃん。

「ぎよがぜざーん……！」

「久重君、あなたキモイわよ」

いつも冷やややかな表情をし、たまに見せるのは人をあざけ笑う、心底嬉しそうな笑み。それくらいしか表情のバリエーションがないと思われていた東金凜々子が——その光景を見て号泣している僕を見てドン引きしていた。

横にいる宇佐美は今の僕の気持ちをまったく理解できていないようだった。

「おいっどうしたんだ久重。お腹でも痛いのか？」

「あはっ宇佐美君、近所の優しいお姉さんみたいね」

東金は僕らを見て嘲笑した。

じゃあ僕はタラちゃんですか!?

しかし、ショックを受けている今の僕にはうまく突っ込むことすら出来ない。

「さて」

東金は目の前のコーヒーを飲み干すと颯爽と立ち上がった。

「私はこれから調べることがあるからここで」
きっちりテーブルの上の写真は回収していた。

「じゃあお元気で久重君」

そう言つと（今日の集まりの主犯の癖に）東金は僕の前から姿を消した。

後姿の黒髪が不吉を予感させていた。

「あれ……？なあ、向こうにいるの一人じゃないか」

僕たちがいたハンバーガーショップから東金が出て行つてから数十分後。僕と宇佐美もすでに表の大通りにいた。

そこで遭遇した茶髪パーマバカ——幸村人一はキョロキョロと誰かを探しているようだった。

「誰かじゃなくてお前らだよっ！」

合流した幸村は息を切らしながら僕たちに怒鳴っている。

「で、お前はどっしょにいるんだ」

「どうして！？ 何それ！ お前らがオレを生贄にしたんだろうが！！！」

「生贄は生き返らない」

「お前はやっぱり鬼だっ！」

いつものアホトークを一通りこなして幸村はある異変に気付いたようだった。

「……東金さんは？」

僕は大きく溜息をついた。

「帰ったよ」

「……………ええええええええええええええええええ！」

今回ばかりは僕も幸村に賛同する。

「マジでしんじらんねえな、あの女！」

帰り道、幸村はブツブツと東金凛々子に対して文句をたれていた。
「人のことを囷にしといて先に帰るなんてなあ！」

道に設置されているゴミ箱をいらつくように蹴飛ばす。

それを見て僕は幸村の頭を軽くはたいた。

「そういえば」

そう言って珍しく宇佐美が切り出した。

普段三人で帰っているときにはありえないことだ。

「お前、どうやってあの後帰ってきたんだ？」

宇佐美が言う『あの後』とは幸村が警官に捕まった後のことだ。

「そうそう！」

幸村は思い出したように言う。

「交番の近くに来たところでさ、あの二年生がちょうどそこに走ってきて、警察から事情を聞くと『ああ、すいません。こいつきつと僕との待ち合わせに遅れそうだから通行禁止の橋なんて渡ろうとしたんです。僕に免じて許してくれませんか？』って言うてくれて――」

「待て、お前が何を言ってるのかさっぱりわからん！」

饒舌に話す幸村を制した。

「だーからー、いつかの昼飯の時、自販機の前でオレに注意をしてきた二年生がいたって話したろ？」

僕はその記憶を脳内から探し当てた。

「ああ、あのお前が自販機を壊したときのあれか」

「……いや、オレはやってないんだ……！」

まだ言い張るのか。こいつは。

「で、その見知らぬ二年生が、見知らぬお前に話を合わせて助けてくれたって？」

「そうなんだよ！ 結構警察に顔が利く奴らしくてさあ！ オレ、あいつのこと誤解してたぜ、めっちゃ良い奴だ！」

「ふう……ん」

嘘くせえ……。

「でもお礼を言う間もなく走り去ってしまったんだ……」
漢だ。

幸村はそう呟くと目を輝かせて、空を見ている。

きつとあいつの目にはその二年生が写っているのだろう。

「まあ何でも良いけどな。警察沙汰は嫌だし」

僕は家がある方向へと歩き出す。

しかし、僕の肩に幸村の手が置かれる。

「なんだよ……」

しぶしぶ振り向いた。

幸村は興奮冷めやらぬといった様子で鼻息を荒くして僕に言った。

「今から探しに行こうぜ！ まだ昼だし！」

「はあ？ ……何を？」

僕にはこのバカが何を言っているのが本当にわからなかった。
だが、こいつはそんな僕に当然といった様子で答えた。

「その二年生を探すんだよ！ そして今日中に礼を言う！」

そして、幸村は僕と宇佐美の手を引っ張って歩みだす。

混沌の螺旋はゆっくりと回り始める。

監禁 01

突然だが。

——私、清風しほりは攫われたらしい。

らしいというのは犯人の姿を見ていないからである。

今、私がいるところは薄暗い、埃っぽい匂いがした倉庫のようなところだ。日本風の作りなので恐らく《蔵》なのではないかと思う。自分の身体を見ると両手両足がきつく縛られていた。

状況を探ろうと動きにくい身体を首だけ必死に伸ばして、辺りを探る。すると上の方に長方形をした窓を見つける。しかし恐らく私が立つて自由に手足を使い飛び跳ねても全然届かないであろう高さだった。

「さすがにあそこからは逃げられないか……」

私は落とすことのできない肩を落とした。

そもそも何でこんなところにいるのか。それが分からない。

たしか、先輩の家に行くって事になって……。

私は自分の記憶を探り始めた。

「それじゃあ、もうそろそろ出ようか」

ファミレスで適当に頼んだメニューを食べ済ました後、吉江先輩は立ち上がった。

財布を鞆から出し、レジに向かう。

「あ、私払いますよ」

私はあくまでも社交辞令として慌てた振りをした。

「はあ？ いいよ。女に払わせたら人間として終わりでしょ」

……なんか、言ってる事はすごく真つ当なのに言い方がすごいム

力つく。

特に最初の『はあ?』が。

会ったときから思っていたけど、この人私に対して優しくする気が無いように見える。

いや、というよりこの清風しほりを他の女子と同じように扱っていると言った方が正しいかも。

「あ　ありがとうございます!」

まあ、笑顔は忘れないけど。

私たちがファミレスを出ると先輩が駅の方へ向かって、右を指差した。

それはあの殺人事件が起きた橋の方向でもあった。

「俺んち、実はあの橋の近くなんだよね」

初耳だった。

しかしそうか。それなら納得がいく。だから先輩はこの事件について調べていたのか。自分の家の近所で起こった事件なら興味を持つてもおかしくない。

「じゃあ行こうか」

私は前を歩く先輩の背中について行く。

しかしこうして見ると、この男はやっぱりかなりの高レベル体なのだと思う。

程よい長さに整えられている髪、彫りの深い顔は男らしさを感じさせる。

これでスポーツが全国レベルと言ったらもてるのもうなずけるものだ。

……私に吊り合うのは男はこれくらいのレベルなのかもしれない。

「ついたよ。あの瓦の屋根の家」

先輩が示したのは昔ながらの日本風屋敷と言った感じで、ものす

ごく大きかった。

……というか、瓦屋根の建物は同じ敷地内に何個も立っていた。どんな豪邸ですか!?

「そんなこと無いよ。俺、両親いなくてじいさんの家に暮らしているんだ」

私が家の感想を言うと先輩は笑って言った（おじいさんについての説明は無かった）

その顔はファミレスで見たそれとはまったく違っていた。

「先輩兄弟はいないんですか？」

しかし、私がそう尋ねたとき、先輩の顔は曇る。

「……いるよ。兄貴が二人ね」

先輩はそれ以外のことは語らなかった。

まずいことを聞いてしまったのだろうか。

「じゃあ、ちょっとじいさんに友達が来たって言うてくるからちょっと待ってて」

先輩はそう言うのと、玄関前に私を待たせた。

私は先輩が戻ってくるまで周りを見渡すことにしたのだが、しかしこの家は広い。

家の前にある門から、玄関まで二、三十メートルはありそうだった。

その間、道は緑で覆われていて、それは松だろうか。昔話に出てきそうな木だった。

「すごい家だなあ……」

その風景の美しさについて感心してしまう。

平穏な時間が過ぎていた。

しかしそれは突然だった。

「——ッ！」

斜め前の松らしき木から謎の人影が出てきて、一瞬で私の口を押さえたのだ。

なんだ！？ 何なんだ！？ これがこの家の客人のもてなし方なのか！？

いや、そんなわけない。それだったらこの男がこの家に住まう日本唯一の忍者って言われた方がまだ信憑性がある。ていうかそれも多分違う！！

私は前から私の口を押さえているその手を、思い切り掴んだ。しかし、その時気付いた。

私の口に薬品の匂いがする濡れたハンカチが押し付けられていること。

そして、この謎の男がそんなものを真昼間から持っている危険人物だということ。

私は遠のく意識の中でそう思った。

ええっと。

つまり、ここは先輩の家なのではないだろうか。

薄暗い蔵の中で、あぐらをかきながら私、清風しほりはそう考えた。

このあたりに蔵がある家なんてないし、あの大きな敷地だ。蔵くらいあるだろう。

その男は私に謎の薬品を嗅がせて気絶させた後、近くの蔵の中へと私を運び込んだのではないか。

男の姿は見えていない、なぜならその男は顔全体を覆うマスクをしていたからだ。わかったのは体つきから男だと言うことだけ。ていうか。

冷静に思考してみる。

私は今ものすごくヤバイのでは……？

そして普通の女子高生ではあり得ない状況下に置かれている事に気がつく。

これって事件に巻き込まれているよねえ！？ どうしよう！？

まだ私にはやるのがたくさんあるのに！！ 主に東金凜々子を見返すことだけど。

東金の名前でふと、気がつく。

——ここはあの橋の近く。

——そしてこの町はついこの間まで、犯罪者なんて砂漠に落とされたピアス並みに見つからなかった平和な町。

——しかし私は今何らかの事件に巻き込まれている。

これから導き出される答えは……。

「もしかしてあの男は赤帽子……？」

私がそう呟いたとき、後ろにある重そうな扉が開いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9717k/>

僕らの町と首吊り死体

2010年10月10日07時15分発行